

柏屋町文化財調査報告書第 56 集

志賀神社遺跡

2021

柏屋町教育委員会

はじめに

本書は、柏屋町仲原二丁目に所在する志賀神社遺跡について、令和元年（2019）度に柏屋町教育委員会が実施した民間開発に伴う発掘調査の成果を記録したものです。

志賀神社遺跡周辺は、仲原池ノ内遺跡や仲原峯屋敷遺跡で古代の集落跡が確認されています。今回の調査で弥生時代の環濠集落、古墳時代の横穴墓、中世の集落跡が発見できました。この調査結果はこの地域で連綿と集落が営まれていたことが判明し、町内の歴史解明に寄与するものだと考えられます。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に御協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和3年3月31日

柏屋町教育委員会

教育長 西村 久朝

03 経過・位置と環境

03 調査に至る経過

03 調査体制

03 地理的環境

04 歴史的環境

06 調査成果

07 調査概要

07 旧石器時代の遺物

07 弥生時代の遺構と遺物

17 古墳時代の遺構と遺物

19 中世の遺構と遺物

33 おわりに

33 旧石器について

33 弥生時代の遺構と遺物

35 古墳時代の遺構と遺物

35 中世の遺構と遺物

39 図版

発行	柏屋町教育委員会
調査起因	専用住宅建築工事
現地調査	令和元(2019)年9月24日～令和元(2019)年11月30日
整理調査	令和3(2021)年3月8日～令和3(2021)年3月31日
使用方位	座標北(国土地図第81号「世界測地系」)。真北に対して0°17'西偏。
遺構実測・遺物実測・執筆	福島日出海
製図	高橋幸作・朝原泰介・上田津由美
編集・遺構写真・遺物写真	高橋幸作
資料整理	上田津由美、板水メイ子、毛利須代
本著に関する遺物・記録類	柏屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

調査地周辺は弥生時代から中世にかけて連續と歴史を追うことができる地域である。志賀神社には町の指定文化財である樹齢約600年のクスノキがそびえ立つ。

調査に至る経過

志賀神社遺跡の発掘調査は福岡県糟屋郡柏原町仲原二丁目1988、1990において、宅地造成及び専用住宅（分譲）建築工事が計画されたことに起因する。

平成31（2019）年4月25日に土地所有者である個人2名より柏原町教育委員会へ事前審査願書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である志賀神社遺跡に含まれている旨の回答を行った。現地は山林となっており、バッカホーを搬入することができず、人力により確認調査を行うこととなった。令和元（2019）年5月14日、15日に確認調査を行った結果、古代の遺構、遺物を確認した。この結果をもとに協議を重ねたが、建築工法計画の変更は難しく、建築工事によって遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査を実施した後、建築工事に着手することとなった。

令和元（2019）年9月10日に緊急発掘調査に関する委託契約を工事主体者である株式会社サン・プラザホームと締結し、発掘調査を実施した。

調査期間は、令和元（2019）年9月24日から令和元（2019）年11月30日まで実施した。

発掘調査報告書作成に係る出土遺物整理作業は、令和3（2021）

年3月8日から令和3（2021）年3月31日の期間で行った。

出土遺物および図面・写真等の記録類は柏原町立歴史資料館にて保管している。

調査体制

令和元（2019）年度

調査主体 柏原町教育委員会
教育長 西村 久朝
社会教育課長 新宅 信久
同課文化財係主幹 西垣 彰博
同課同係主任主事 高橋 幸作
同課同係嘱託職員 福島 日出海
（調査担当）
朝原 泰介
同係臨時職員 上田 津由美
松永 メイ子
毛利 須寿代

令和2（2020）年度

調査主体 柏原町教育委員会
教育長 西村 久朝
社会教育課長 新宅 信久
同課文化財係主幹 西垣 彰博
同課同係主任主事 高橋 幸作
同課同係会計年度任用職員

朝原 泰介
上田 津由美
福島 日出海（報告書担当）
松永 メイ子
毛利 須寿代

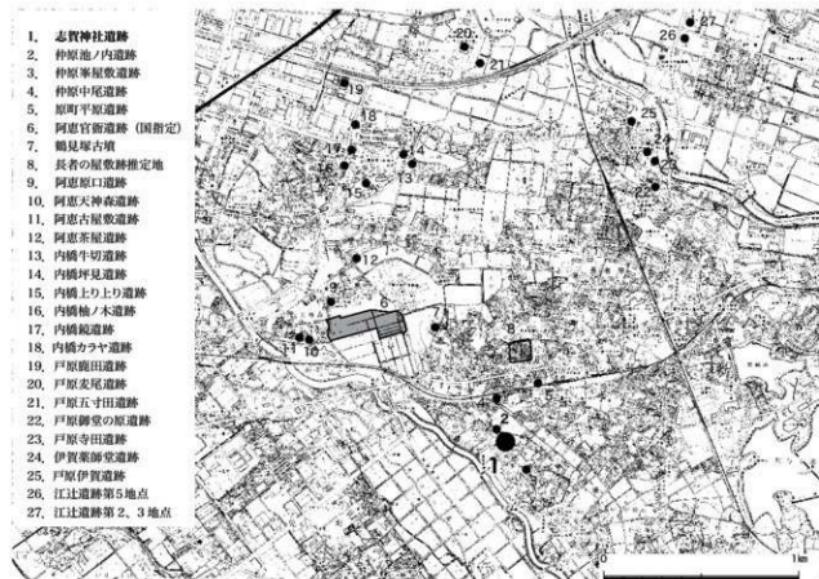
地理的環境

福岡県糟屋郡柏原町は、福岡市の東に隣接し、柏原平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地形である。

柏原平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。平野内は東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く伸びているため、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

志賀神社遺跡は、福岡市との町境に近い多々良川下流域の舌状低丘陵上に立地している。古代の周辺環境は、多々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入江状の内海を形成していたと想定されている。遺跡はこの内海に近く、博多湾と3本の河川を利用した海上・河川交通の集中する場所にあたる。

- 志賀神社遺跡
- 仲原池内遺跡
- 仲原家屋敷遺跡
- 仲原中尾遺跡
- 原町平原遺跡
- 阿賀官宿遺跡(国指定)
- 鶴見塚古墳
- 長者山遺跡推定地
- 阿賀原口遺跡
- 阿賀天神森遺跡
- 阿賀古屋敷遺跡
- 阿賀新屋敷遺跡
- 内橋牛切遺跡
- 内橋坪見遺跡
- 内橋上り上り遺跡
- 内橋樅木遺跡
- 内橋越遺跡
- 内橋カラヤ遺跡
- 戸原鹿田遺跡
- 戸原妻屋遺跡
- 戸原五寸田遺跡
- 戸原御堂の原遺跡
- 戸原田遺跡
- 伊賀御堂遺跡
- 戸原伊賀遺跡
- 江辺遺跡第5地点
- 江辺遺跡第2、3地点



第1図 志賀神社遺跡周辺の遺跡分布図(1/25,000)

歴史的環境

柏屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。

讃文時代から江辺遺跡や戸原伊賀遺跡で集落が確認される。弥生時代になると日々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡米系稻作集落である江辺遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代中期には青銅器生産が知られる地域もあり、日々良川対岸の土井遺跡群(福岡市)、日々良大牟田遺跡群(福岡市)では青銅器鉄型が出土している。柏屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋤先が、戸原鹿田遺跡で銅鏡、内橋カラヤ遺跡で青銅製の筒状遺物が出土しており

り、青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。また、弥生時代中期の甕棺墓群が内橋鏡遺跡や新大間池遺跡、戸原塙内遺跡、辻畑遺跡などで発見されている。その後、弥生時代後期の石蓋土坑墓、木棺墓などが内橋登り上り遺跡で、弥生時代終末期の方形周溝墓が内橋カラヤ遺跡で発見される。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると日々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳(福岡市)が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れると、内橋上り上り遺跡では古墳時代中期と想定される円筒埴輪が出土している。共伴遺物が6世紀後半の遺物であり、後世になつての搬入品と考えられるが、注目される。後期になると推定全長

75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石星形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津宮家の管掌者の墓といわれる東光寺劍塚古墳(福岡市)と同規模・同主体部であり、『日本書紀』繼体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

本遺跡の北東1.5kmに位置する戸原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半の遺物が出土する幅7.7mの溝があり、紡いだ糸を巻き取る棒の腕本が出土している。



第2図 志賀神社遺跡周辺図(1947年米軍撮影の航空写真)

その他にも、祭祀遺構や渡来系遺物が検出され、隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も確認していることから、周囲に倉をともない、手工業工人を抱えた豪族の存在が想定される。

柏屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、本遺跡の北西800mに位置する阿恵官衙遺跡で糟屋郡衙が発見されている。

阿恵官衙遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政府と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衡の出現から都衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により糟屋評の長官の人物名が判明している。まさに阿恵官衙遺跡の政府において「春米連廣國」という人物が評造として政務をおこなっていたこと

が特定された。文字資料により評の長官名が判明していて、なおかつ発掘調査によって評衡の場所が明らかにされたのは、阿恵官衙遺跡が唯一であり、その歴史的価値は極めて重要である。

官衙と古代道路の関係をみると、阿恵官衙遺跡は駅路と伝路が交差する衝に立地することが明らかになった。この駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、中央政権が最も重視した古代道路である。この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。

内橋坪見遺跡は、大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と回続施設を伴うことから、駅家（夷守駅）の可能性が高いと考えられる。

その夷守駅が置かれた駅路の近く、多々良川に隣接した低地に多々良込田遺跡がある。掘立柱建

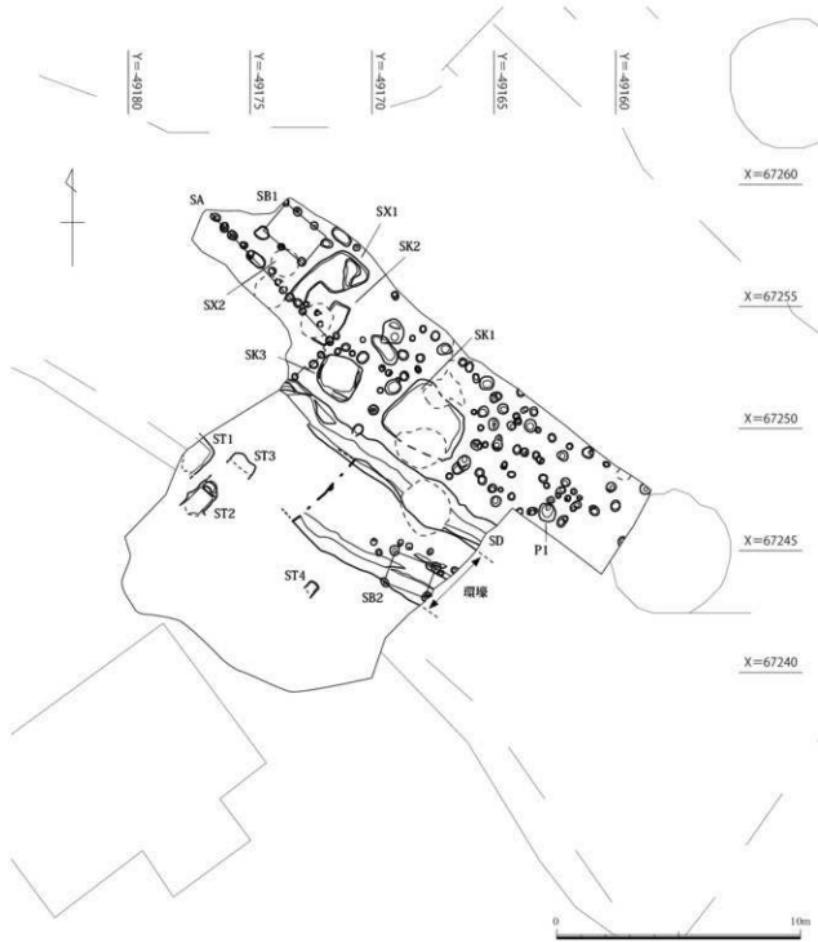
物群と多くの船載品や、役人の存在を示す石帶などが出土している。立地環境と多様な出土品を考えると港湾施設とみるのが妥当であろう。しかも大宰府式鬼瓦が出土していることから、郡津レベルではなく、大宰府の影響が強い港と思われる。

中世の遺跡は、戸原伊賀遺跡や戸原妻尾遺跡、戸原五寸田遺跡、原町平原遺跡などで確認される。柏屋町周辺は建武3(1336)年に足利尊氏と菊池武敏が戦った多々良浜の戦いの地であり、その時期を境に戸原五寸田遺跡、原町平原遺跡などの遺跡は廃絶する傾向にある。

柏屋町周辺は、縄文時代から連續と遺跡が所在しており、古代においては糟屋郡の役所跡も所在する。古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域となっていている。

調査成果

調査では、弥生時代前中期の埋蔵と貯蔵穴1基。古墳時代後期の構築墓4基。中世の掘立柱建物2棟、方形土塀1基、圓形土塀、溝状造槽、埴り土造槽とともに、柱穴柱を検出した。特に、弥生時代前期初頭には理窟集落が存在していたこと、江戸街道第2・3地点との関係が判明されよう。また、遺物では石器時代末～縄文時代草創期の神子型石斧が壇屋内で初めて出土している。



第3図 志賀神社遺跡全体図(1/200)

調査概要

今回、仲原丘陵の北部に位置する志賀神社の南側を調査した。その結果、旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけての細石核、細石刃と神子柴型石斧が検出された。また、弥生時代前期初頭の環濠が検出され、同時に貯蔵穴1基、土坑状の遺構1基も確認されたことから、神社境内地から南側の丘陵地を含む広い範囲に、当該期の環濠集落の存在が推定された。また、丘陵西側の急斜面では、上下三段にわたり構築された古墳時代後期の横穴墓4基が検出される。さらに、丘陵上では12～13世紀頃を中心とする掘立柱建物、櫛、方形土坑等が検出され、西側急斜面上部には平場をはじめ、盛り土状遺構や横堀状の溝状遺構が確認されたことから、防御機能を備えた居館的な建物群の存在が判明した。

旧石器時代の遺物（第4図）

1 チャート製の細石核で、角礫状を呈す厚手の剥片を使用する。打面調整は、頂部左下方の角より大きく一面を剥ぎ取り、左側面にも粗い加工を施して形状を整えている。剥離作業面は正面と右側面にあり、長さ2.7cm、幅0.7cm程度の細石刃が得られたと考えられる。高さ2.9cm、長さ2.5cm、打面は長さ1.4cm、幅3cmの長方形を呈する。2 黒曜石製の細石刃で、頂部は打面調整され両側縁が並行し、中央に一条の稜線を有す。色調は灰色で黒色の細かな点が多数見られる。長さ1.9cm、幅0.7cm、

厚さ0.3cmを測る。3 打製片刃石敷で石材は玄武岩と考えられる。素材は扁平な長方形状の自然礫を使用し、形状は断面形がかまぼこ状の半円形を呈すが、右側縁のみ平坦で直線状をなす。整形等の加工は、胴部上半が欠損のため全体は判然としない。刃部は両面を中心に行い、刃部側から内側に大きく剥離して片刃状に整形し、その後、刃先に調整を施す。刃部側より観察すると、背面は丸味を帯びて高く、裏面は平坦となる。なお、両側縁及び表裏両面には自然面が多く残る。残長5.1cm、幅5.2cm、厚さ3.0cmを測る。

3.9m、深さは垂直方向で2m、丘陵側では2.7mに達する。環濠の南側で確認した土層図（第5図）を観察すると1～4層は、中世に造成された平場の堆積層で、5層は関連する盛り土の一部と考えられる。したがって、環濠の堆積土は6～14層となるが、その大半が左側（東側）の高所から流れ込んだもので、9層から上層になるとかなりの厚さで水平な堆積状況を示しており、10層以下とはかなり異なる様相である。10～14層では環濠の機能が徐々に失われ、9層以上は大量土砂の流入による環濠機能の喪失と放棄の状況が読み取れる。

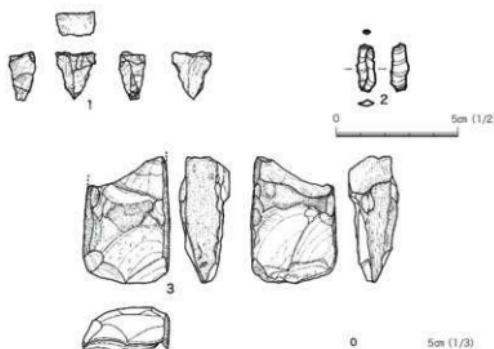
弥生時代の遺構と遺物

環濠（第5図）

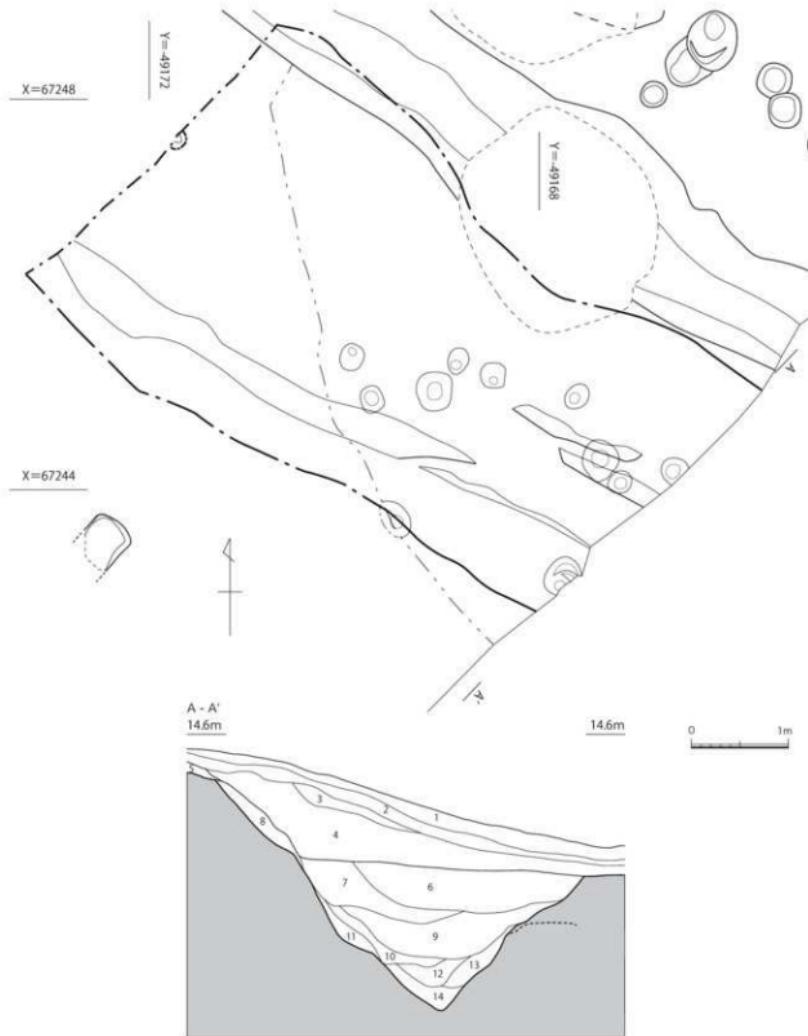
調査区の西側において、大規模な環濠の一部を検出したが、その断面形は逆三角形状を呈しており、形態としてV字状の環濠と考えられる。検出範囲はわずか6.36mほどであるが、幅3.2～

環濠出土遺物（第6、7図）

1～9は環濠底部から検出。1 壺の外反する口縁部片で、外面に粘土を貼付けて肥厚させ、下方にわずかな段を有する。調整は、内外両面とともに横位のナデによるが、外面は強いナデにより滑らかに仕上げており、焼成は良い。2 壺の肩部片で、頸部との接合部が強く屈折する。外面は段を有して



第4図 旧石器時代の遺物 (1, 3: 1/3) (2: 1/2)



1. 表土
2. 灰褐色土 (5YR5/2)
3. 灰褐色土 (7.5YR5/2)
4. 灰褐色土 (7.5YR5/2) 2mm 前後の礫を多く含む 硬くしまる
5. 明赤褐色土 (2.5YR5/8)
6. 明赤褐色土 (5YR5/6) 2mm 前後の礫を多く含む 硬くしまる
7. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) やや軟質で硬くしまる
8. 赤褐色土 (2.5YR4/8) 2 ~ 3 cm の亜角礫を含む 硬くしまる
9. にぶい赤褐色土 (5YR4/3) 5mm の礫状に含む
10. 明赤褐色土 (5YR5/6) 2mm 前後の礫を多く含む 非常に硬くしまる
11. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 2mm 前後の礫を多く含む 非常に硬くしまる
12. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 2mm 前後の礫を多く含む 非常に硬くしまる
13. 明赤褐色土 (5YR5/6) 2mm 前後の礫を少し含む
14. 明赤褐色土 (5TR5/6) 非常に硬くしまる

第5図 地盤平面図、土層図 (1/50)

おり、内面の屈折面は明瞭な稜線を形成する。3鉢の胸部片で、逆くの字状に屈折して外面に稜線を形成する。上半部には丹塗りの痕跡が観察される。4高杯の脚部片で、杯部との接点に一条の突帶を有す。表面の風化が進むが、調整は外面上部に縦位のヘラミガキ、内面には縦位のユビナデが確認される。5突帶文彫の胸部片で、逆くの字状に屈折した外面に、直接貝殻腹縁のキザミを施す。風化が進行するものの、調整として内面に斜位のナデが確認される。6突帶文彫の胸部片で、逆くの字状の屈折部に突帶を貼り付け、縦位に貝殻腹縁のキザミを施す。調整は外面に横位の貝殻条痕を、内面に斜位の貝殻条痕を施す。7突帶文彫の脚部片で、直線的に立ち上る外面に突帶を貼り付け、貝殻腹縁のキザミを斜位に施す。調整は外面に横位の貝殻条痕を、内面に斜位のナデを施す。8壺の底部片か、整形時に粘土紐の輪を貼り付けて底としており、外方に強く張り出す。やや上げ底をなし丁寧なユビナデにより仕上げる。底径6.8cmを測る。9突帶文彫の底部片で、外方に張り出してやや厚く、外面に指頭によるオサエが強く残る。底径9.1cmを測る。

10～20は環濠の下方より検出したものである。10壺の肩部片で胸部の張りが弱い。外面の頸部との接合部にはかなり強い段が形成されるが、内面の屈折面は弱く低い稜線状を呈す。11高杯の口縁部片で、口縁端部は方形状を呈し、全体がS字状に強く外反する。内外の両面ともに丁寧な横位のナデが観察され、内面には丹塗りの痕跡が観察される。12は11と同様の高杯の口縁部片で、

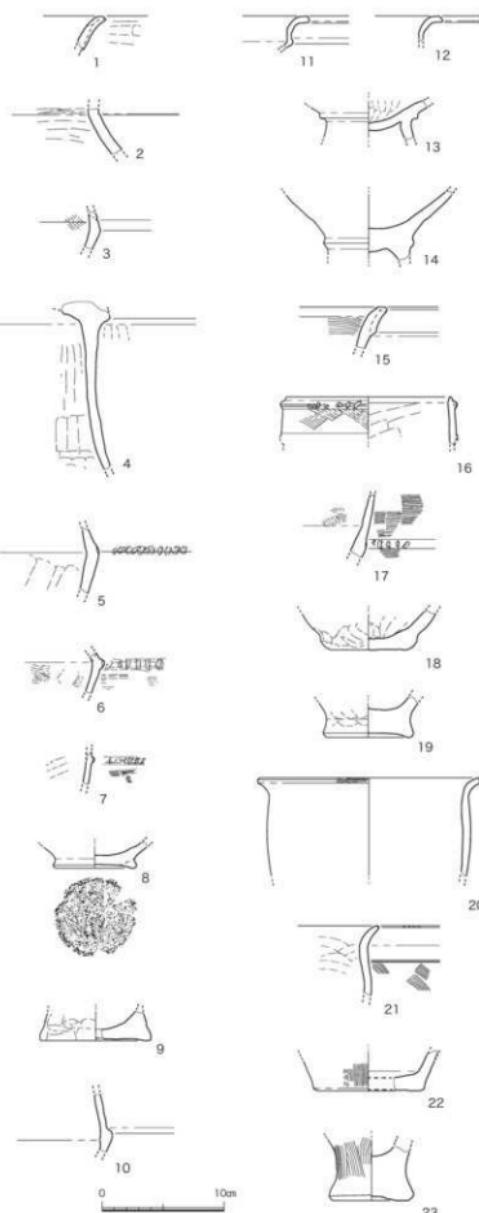
S字状に強く外反する。風化が進むものの黒色磨研の特徴が残る。13高杯の脚部片で、一条の突帶を配しており、脚部は杯部とともに開き、背丈が低いタイプのものと考える。調整は外面に横位の強いナデを施し、杯部内面を連続的なユビナデにより仕上げる。突帶部の径は8cmを測る。14高杯の脚部片で、一条の三角状突帶を配し、形状等は13と同様となる。脚及び杯部がやや直線的に延びており、背丈が高いタイプと考えられる。調整は風化の進行により不明である。突帶部の径は7.4cmを測る。15鉢の口縁部を考える。口縁部外面に粘土を貼付けて肥厚させており、壺の口縁部に類似するが、口縁部が短く直立気味である。調整は外面に横位のナデを、内面には横位のハケメを施していく。16突帶文彫の口縁部片で、口縁部の突帶は、口縁端部より少し下がった位置に、胸部突帶はその下2cm程近くに位置しており、胸部は屈折せずに直線的である。上部突帶には貝殻腹縁のキザミを入れるが、下方の突帶は剥落して判断としない。調整は外面に斜位の貝殻条痕を施すが、内面は風化のため斜位のナデ、もしくは貝殻条痕なのかが判別できない。口径13.7cm、残高3.5cmを測る。17突帶文彫の胸部片で、弱い屈折部に貝殻腹縁のキザミを施し、内面の屈折部が弱いライン状を呈す。調整は外面に横位の貝殻条痕を、内面には斜位の貝殻条痕を施す。18壺の底部片か。形状が外方に張らざるにすばまる感じを受ける。やや厚く、外面には指頭によるナデとオサエが強く残り、内面にはユビナデによる調整が観察される。底径6.5cmを測る。19突帶文彫の底部片で、外方に

やや張出す厚手の上げ底状を呈す。調整は外面に指頭によるオサエが観察される。底径7.4cmを測る。20壺胸部の上半部片で、如意形口縁を呈し、胸部は張らずに直線的に立ち上る。口縁端部はやや上向きで、端部の上下全面にキザミを施すが、調整とともに表面風化のため不鮮明である。口径18.3cm、残高8.1cmを測る。21～23は、環濠上部から検出。21壺の口縁部片で、口縁端部は三角状を呈しており、先端にキザミを施す。全体には緩やかなS字カーブを描き、頸部に一条の沈線部を配す。調整は胸部に斜位の細かなハケメを施し、内面には横位のナデが観察される。22壺の底部片で平底を呈す。調整は外面に縦位のハケメが施されるが、それが底部附近に至っていて、そのまま残っている。底径9.1cmを測る。23壺の底部片で、全体に細長く高くなり、厚底で上げ底を呈す。調整は外面に縦位のハケメを施す。

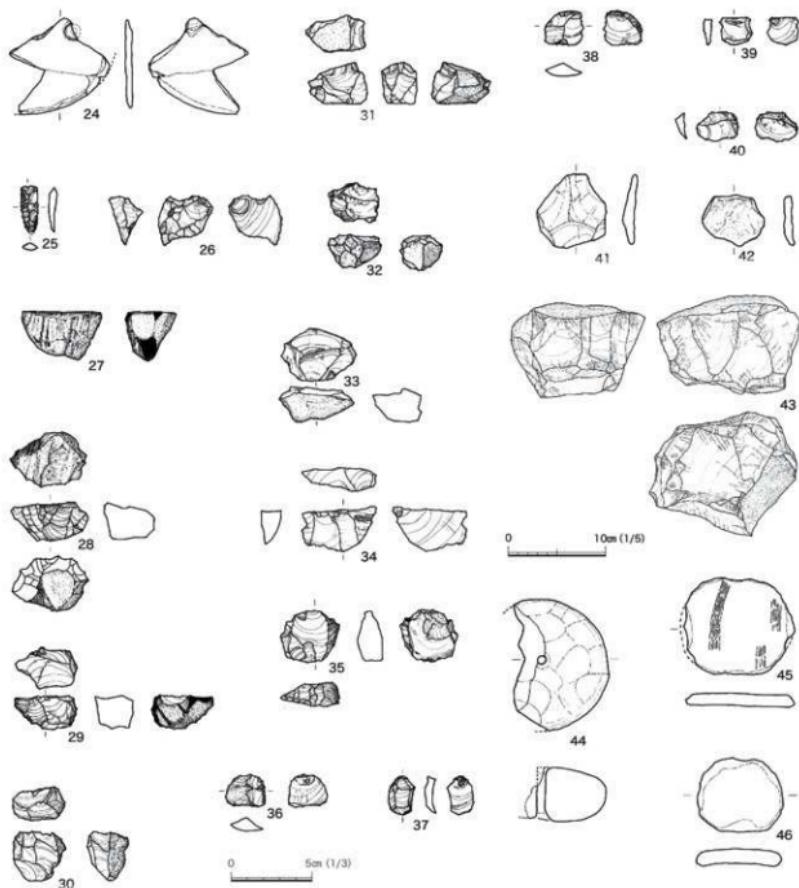
24頁岩質砂岩製の磨製石庖丁片で、穿孔途中で破損した未完成品である。形状は身幅が広い外湾刃半月形を呈し、扁平で薄いつくりであるが、背面形は欠損のため不明。また、刃部の断面形は両刃のシンメトリーとはならず、偏刃状を呈す。残長5.8cm、残幅6.0cm、厚さ0.4cmを測る。25黒曜石製の石錐で、先端の一部を欠く。縦長削片を素材とし、両面加工を施して凸レンズ状の断面形に仕上げる。また、基部には比較的大きな剥離を加え、楔状の断面形に仕上げており、柄に取り付けと固定がしやすい加工を施す。残長2.8cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。26黒曜石製の削器で、素材はやや不整形の縦長

剥片を使用する。素材剥片の剥離時の打撃は粗いようで、バルバースカーやヒンジ・フラクチャーが生じており、両側縁も蛇行して末端が幅広の厚手となっている。また、岡左側縁部の打面には、縦長剥片の剥離痕があり、表面にもそれが認められることから再生剥片の可能性を示す。削器としての調整剥離は、両側縁と端部に裏面から連続的に施す。長さ 3.0cm、幅 3.3cm、厚さ 3.0cm を測る。

27 黒曜石の原石で、半船底状を呈しており、およそそのような原石が原材として搬入されたものと考える。高さ 3cm、長さ 4.8cm、幅 2.8cm を測る。28 黒曜石製の石核で、27 のような原石を原材とし、自然面を打面としながら連続的に縦長剥片を剥離するもので、長さ 1cm ~ 2cm、幅 0.5cm 程度の素材剥片を剥離しているが、石核上下と後方に多くの自然面を残して完了しているのか。高さ 2.5cm、長さ 4.5cm、幅 3.4cm を測る。29 黒曜石製の石核で、上面より幅広の剥片を連続的に剥離した後に、打面の 90° 転移を行ない、最初の打点付近から下方に向かって、同様な幅広の剥片を連続的に剥離する。しかし、後方には自然面が残る。高さ 2.0cm、長さ 3.8cm、幅 2.6cm を測る。30 黒曜石製の石核で、円錐状を呈す。打面は上下両方向にあるが、当初は下方より開始し、その後、下方左側より右斜め上方に打面ごと大きく剥離する。その上で、打面を上面に転移し、自然面を後方より幅広に剥離した後、その末端を打面として 1cm 程度の幅広剥片を剥離して終了する。しかし、後方の半面にはまだ自然面が残る。高さ 3.0cm、長さ 3.24cm、幅 2.0cm を測る。31 黒曜石製の石核で、



第 6 図 琉球出土遺物実測図(1/4)



第7図 球塚出土遺物実測図 (24~42, 44~46:1/3) (43:1/5)

自然面を打面として剥片を剥離するが、右側縁の上面右側縁を短く幅広に剥離して、打面を調整した後に剥片を剥ぎ取っている。剥片は長さ1.5cm程度の幅広のものと想定され、高さ2.6cm、長さ3.5cm、幅2.2cmを測る。32 黒曜石製の石核で、最初に上面を大きく剥離するが、ステップフレーキング状の段を形成する。次に、その末端を打面として剥片剥離

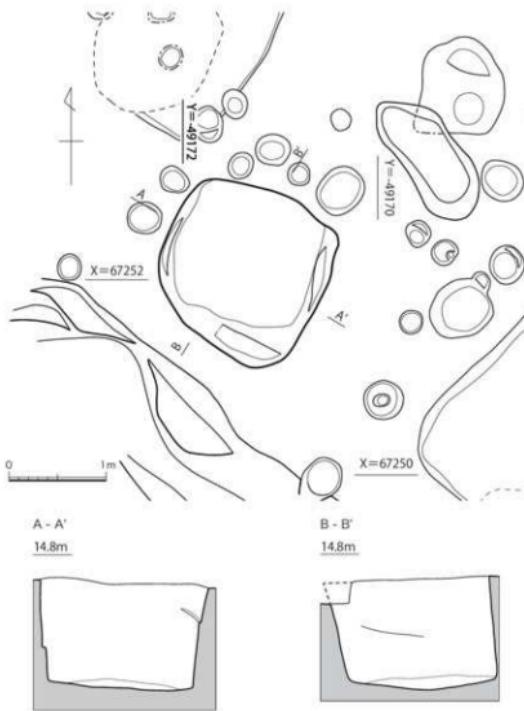
を行ない、さらに、その末端に打面転移を行なっている。つまり、打面を連続的に転移させ、多面体の石核利用を行なっている。高さ2.0cm、長さ2.5cm、幅3.1cmを測る。33 黒曜石製の石核で、亀甲状を呈す。当初、側面の自然面より剥離し、次に、左右の両側縁から剥離して、再び、正面後方より幅広の剥片剥離を行なう。この場合、常に周囲の自然面を打面

とする。高さ2.0cm、長さ3.3cm、幅4.6cmを測る。34 黒曜石製で、身の薄い半船底状を呈しており、石核の剥離作業面の再生剥片である。上面の2箇所に剥離痕が残るが、その打点付近に打面を転移し、下方に向けて剥片を連続的に剥離している。なお、身の薄さと上部及び正面の剥離痕が、本体裏面の剥離によって何れも切られてしまふことから、石核本体の右側面

上方より一打で剥ぎ取り剥離作業面の再生を図ったものである。なお、調整加工等はなくその後の使用は認められない。長さ4.5cm、幅2.7cm、厚さ1.2cmを測る。

35 黒曜石製の打面再生剥片で、形状は野岳型細石核の打面再生剥片に近い。上面後方より幅広の剥離を加えて打面とし、縦長の剥片を剥ぎ取る。その後、打面再生のため当剥片を剥離し、さらに、正面下方に細かな剥離を加え、搔器あるいは削器として使用した可能性が考えられる。長さ3.1cm、幅3.7cm、厚さ1.5cmを測る。

36 黒曜石製の幅広縦長剥片で、正方形状を呈す。自然面を打面とし裏面にバルバースカーが生じる。自然面が残る表面には、右側縁より当初の剥離2面が観察され。その後、90°の打面転移とともに当剥片が剥離される。右側縁には細かな加工が施され使用の可能性を示す。長さ2.0cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。37 黒曜石製の縦長剥片で、自然面を打面とし裏面にバルバースカーが生じる。右側縁に自然面を残し、上端部が台形状にそぼまる。長さ2.3cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmを測る。38 黒曜石製の幅広縦長剥片で、自然面を打面とする。表面には、下方・左側縁・右側縁上方と90°異なる三方向の剥離痕が観察され、連続的に打面転移が行われる。長さ2.0cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。39 黒曜石製の幅広縦長剥片で、正方形状を呈す。裏面にバルバースカーが生じる。表面の剥離は右側縁により行われており、打面が90°転移される。長さ2.0cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。40 黒曜石製の横長状剥片で、打面は自然面の稜線を利用する。表面には左側縁



第8図 SK3平面図、断面図(1/50)

より2条の剥離面が観察され、90°の打面転移が行われる。長さ1.8cm、幅2.6cm、厚さ0.6cmを測る。41 玄武岩製の剥片で、表面には周囲から中心に向かう剥離が観察され、石器の整形剥片の可能性を有す。なお、0.1cm以下の黒色粒を多く含む点から安山岩の可能性も考えたい。長さ4.5cm、幅4.3cm、厚さ0.7cmを測る。42 玄武岩製の不整形剥片で、表面は自然面である。自然面の表面調整剥片と考えられ、玄武岩の原石を搬入した可能性を示す。長さ3.1cm、幅3.8cm、厚さ0.5cmを測る。43 玄武岩製の石核で上面と側部の一面に自然面

を残す。自然の円錐を搬入して原材とし、上面の自然面を打面としながら、側面的一面を残して周囲を連続的打撃しながら幅広で縦長の剥片を剥離する。その後、側面に残る自然面の下方より、底面に沿って打撃を加えて幅広の剥片を剥離しており、打面の転移を図る。しかし、新たに自然面を打面とするため、前段の剥離面を打面として利用するような連続性は認められず、一旦、剥片剥離を終了させた後に、新たに側面の自然面から開始するようである。当初の連続的剥離では長さ5cm、幅3.0cm程度の幅広縦長剥片が完成し、新たな下方の剥離作業では長さ

8.0cm、幅7.0cmの大型剥片が剥ぎ取られる。しかし、それら剥片類を素材とした製品については不明である。高さ10.0cm、長さ15.0cm、幅12.6cm、重さは2.6kgを測るもので、本来、もう一回り大きな自然縫の形状で搬入されたと考えられる。**44** 土製の紡錘車で、中央付近に孔が位置し、全体の1/2ほどを欠く。調整は全面に指頭によるナデ、もしくはオサエの痕跡が観察される。径8.1cm、厚さ3.3cm、中央の孔径0.5cmを測る。**45** 円盤状の土製品で、甕の破片を転用しており、表裏の両面に貝殻条痕が見られる。長さ5.9cm、幅7.0cm、厚さ0.7cmを測る。**46** 円盤状の土製品で、表裏の両面とともにナデが見られる。長さ4.5cm、幅5.2cm、厚さ0.9cmを測る。

SK3(貯蔵穴)(第8図)

平面形は開丸方形を呈し、東、西、南の三方向には一部テラス状の段が存在するが、北側に関しては底部が外側に張り出している。断面形は台形状を基本とするが、南北に関しては北壁がオーバーハングするため、平行四辺形状となっている。なお、遺物は検出されていない。東西1.67m、南北1.70mと正方形状を呈し、深さ1.15mを測る。

SX2(不明遺構)(第3図参照)

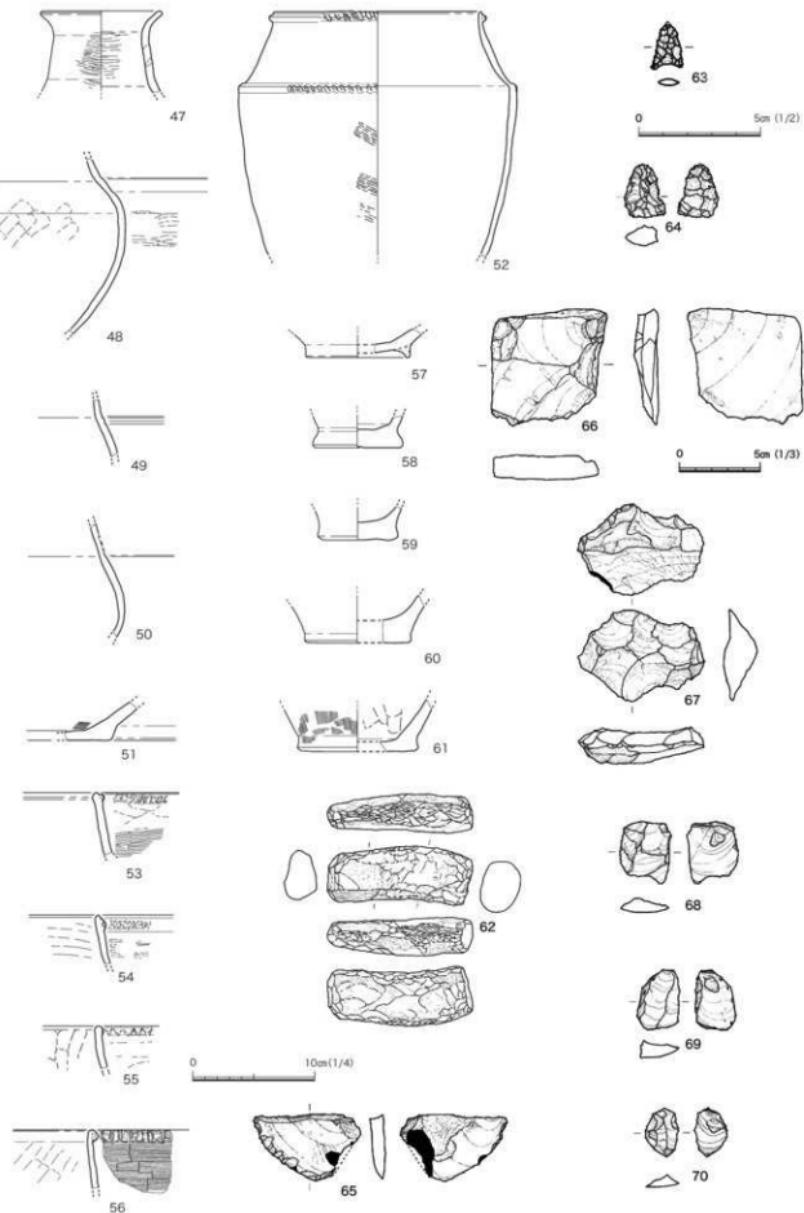
調査区北西端側でSB1と柵列に挟まれ、SX1の西側に位置する黄褐色の包合層中に落ち込みらしきものが存在したが、図化をしていない。まとまった遺物が検出されたものの、遺構なのか自然の堆みなののかは判然としなかった

が、印象としては小規模の窓穴状であった。

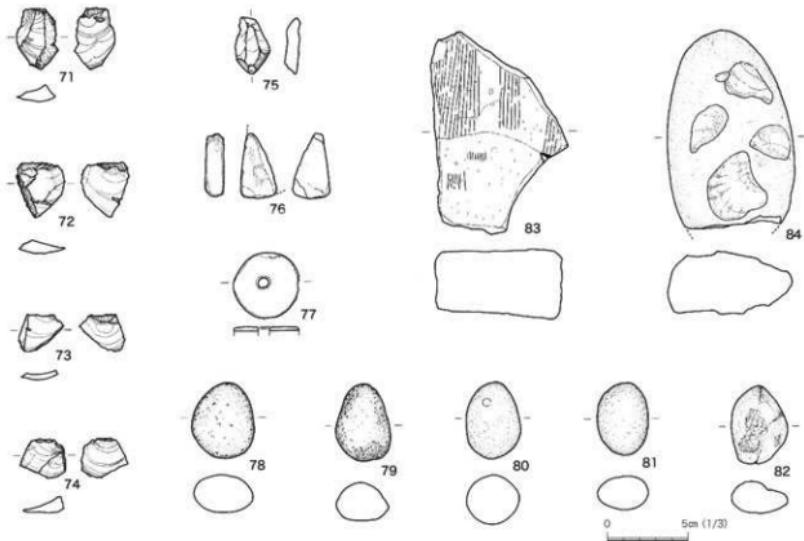
SX2出土遺物(第9、10図)

47 黒色磨研の壺頸部片で、口縁部は外反し口縁端部を丸く收める。頸部は直線的だが、口縁部及び肩部の接合部は、それぞれわずかに屈折面を呈し、かすかな沈線状のラインとして表れる。粘土の接合は内傾を示し、調整は内外の両面ともに横位のミガキを施す。口径10.0cm、残高6.6cmを測る。**48** 壺の胴部片で、肩部から胴部にかけて丸味を帯びて大きく張り出すタイプである。頸部との接合部には、外面に明瞭な段を有し、内面の屈折面は棱線状を呈す。調整は外面に横位のミガキを施し、内面は斜位の指頭によるナデが観察される。残高14.7cmを測る。**49** 壺の肩部片で、重心の低い胴部下半が張るタイプと考えられる。頸部との接合部は若干屈折し、外面に2条の沈線文が配され、内面の屈折面は稜線状を呈す。調整は外面に強いナデが施されるが、内面は風化のため判然としない。**50** 壺の胴部片で、胴部下半が張るタイプと考えられる。頸部との接合部は若干屈折しており、外面の段は弱く、内面の屈折面もわずかに隆起する程度である。調整は風化が進むものの外面にミガキが見られ、内面は一部にナデが観察される。**51** 壺の底部片で、平底から若干斜め外方に立ち上る。胴部へ外反は強く、大きく張り出した胴部形態が考えられる。調整は底の内面に一部ハケメが観察される。**52** 突帯文甕の上半部片で、口縁部は逆くの字状に強く屈折して肩部をつくる。突帯文は二条で口縁端部付近と最大径

を示す肩部に配す。両突帯には貝殻腹縫による斜位のキザミを施すが、明瞭な突帯の口縁端部に比べ、肩部はわずかに張り付けた粘土の隆起を見る程度である。器面全体の風化が著しく、調整は胴部の外面に斜位の貝殻条痕が、内面の屈折部付近に横位のナデがわずかに観察されるのみである。口径18.0cm、最大径(肩部)23.0cm、残高20.0cmを測る。**53** 突帯文甕の口縁部片で、屈折は弱く内傾気味の傾きを示し、二条突帯と考えられる。突帯は貝殻腹縫による斜位のキザミを施し、口縁端部付近に配す。調整は口縁部の外面に斜位のナデを施した後、下方を横位の貝殻条痕で仕上げる。内面は横位のナデが観察される。**54** 突帯文甕の口縁部片で、**53** と同様の傾きを示すと考えられる。突帯は貝殻腹縫による縦位のキザミを施し、口縁端部付近に配す。調整は口縁部の下面に斜位のナデを施した後、下方を横位の貝殻条痕で仕上げる。内面は横位のナデが観察される。**55** 突帯文甕の口縁部片で、直立する口縁部の下方から肩部へと屈折するものと考えられる。突帯は口縁端部を肥厚させ、ヘラ状工具による下方からの刺突、あるいは押引の様相を呈した三角形状のキザミが連続する。調整は外面に横位の粗いナデを施し、内面には指頭による縦位のナデを上端から下方へと順に施す。**56** 突帯文甕の口縁部片で、直口する口縁部は下方に向かって緩やかに開く。突帯は口縁端部に粘土紐を貼り付け、貝殻腹縫による縦位のキザミを施す。調整は外面に横位の貝殻条痕を施し、内面には斜位の指頭によるナデを上端から下方へと順に施す。**57** 壺の底部片か。整形時に粘土紐の輪を貼り付けて底とし、上げ底に直立気



第9図 SX2 出土遺物実測図 (47~62:1/4, 64~70:1/4, 63:1/2)



第10図 SX2出土遺物、ピット及び表探の遺物(1/3)

味に張り付く形状は高台のような印象である。外面の調整はナデが観察されるが、内面は不明。底径8.6cmを測る。58 突帯文甌の底部片で、底が大きく張り出して厚底を呈す。外面の調整はナデが観察されるものの、内面は不明。底径7.8cmを測る。59 突帯文甌の底部片で、若干張出する底部は厚底を呈す。外面の調整はナデが観察されるものの、内面は不明。底径6.6cmを測る。60 突帯文甌の底部片で、張り出しじゃなく厚底で直線的に立ち上る。調整は内外の両面ともにナデを施す。底径8.8cmを測る。61 甌の底部片で、薄手の平底で張出し気味の形状を呈す。調整は外面に縦位の細かなハケメを下方にまで施し、内面には指頭によるナデを下位より上方へと施している。底径10.0cmを測る。

62 扇製柱状片刃石斧の未完成

品である。色調は明褐灰色を呈し、材質は全体に粉を吹いたような風化が進んだ状態の中に、細かな角礫状の粒が浮き出たように存在する。また、右側面は自然面であるが、ラミナ状の細かな葉理が見受けられる。風化面の薄く剥がれた箇所を観察すると、内部は暗灰色を呈すよう、本来の色調と考えられ、現状で近いものは、層灰岩を含む頁岩系のものと推定する。素材としては、河川等でやや磨滅した亜角礫等の少し角が残る偏平(幅4cm、厚さ2.5cm)な棒状礫を使用する。その場合、幅広な4cm幅の平坦面を正面とすれば、目取りは横目となるが、2.5cmの厚み側を正面とし、幅広平坦面を側面に使用するため縦目となる。整形の加工は、素材のやや磨滅した角を潰すように葉理に沿って、上下(前後の正面に相当)両端と先端(刃部に相当)、基部(基

端に相当)に対し、幅1cm程の剥離を全体に細かく加え、全体の形状と断面形が梢円になるように整形する。しかし、剥離加工は左右の両側面と基端には及んでいない。その後、基端を除く両側面に敲打による調整がなされるが、当資料の加工はそこまで止まっている。長さ11.8cm、幅4.0cm～4.3cm、厚さ2.5cm～3.0cmを測り、重さ277g。なお、江辺遺跡第2地点より柱状片刃石斧の未完成品2点が得られているが、比較すると肉眼ではあるが近似した石材と考えられる。63 黒曜石製の打製石鐵で、四基式の両面加工で、先端をわざかに欠く。長さ1.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。64 黒曜石製で、柏屋町教育委員会「江辺遺跡第4地点」柏屋町文化財調査報告書第14集の報告において牙状尖頭器と称された尖頭器状の石器

である。尖頭器とするには先端が丸味を帯びて銳利さを欠き、石鎌未完成品とするなら厚さをかなり減する必要があろう。両面加工は完成されており、この状態での使用が考えられる。注意点として当資料に限るが、表裏の加工様相が異なる。特に、表面先端の加工は、細長な櫛状剥離が連続しており、裏面先端の細かな刃こぼれ状の剥離と合わせてスクレイバー・エッジを想起させる。長さ3.3cm、幅2.5cm、厚さ1.2cmを測る。**65** サヌカイト製の削器で、打面及び表面に自然面を残す横長剥片の円弧を描く末端部に、表面側から連続的に剥離を加えて刃部を形成する。長さ4.0cm、幅6.5cm、厚さ0.7cmを測る。**66** 打製の石庖丁か。石材はサヌカイトもしくは、ホルンフェルスと思われる方形の板状剥片を素材調片とする。表面と裏面の剥離方向は180°異なり、本体を剥ぎ取る際に、打面転換が行われる。右側縁にはノッチ状の抉りが入り、末端部には鋸歯状の剥離が施される。長さ7.1cm、幅6.7cm、厚さ1.3cmを測る。**67** 石核か。石材は不明だが表面は茶褐色に変色するが、内面は灰色のチャートに近い質である。形状は平面形が圭頭形で、断面形は逆三角形状を呈す。石核とすれば周縁全体より中央に向けて剥離されており、幅広の半円形状剥片が連続的に剥離されたと考える。あるいは、圭頭形の尖頭器の可能性もあるが、全長が短く片面加工という点に難点がある。高さ2.0cm、長さ7.7cm、幅5.5cmを測る。**68** 黒曜石製の幅広縦長剥片で、正方形状を呈す。自然面を打面とし上下方向及び右

側縁より剥離され、打面転移が行われる。裏面にはバルバースカーが観察される。長さ3.7cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmを測る。**69** 黒曜石製の幅広縦長剥片で、自然面を打面とし表面に二条の剥離痕と左側縁に自然面が存在する。裏面にはバルバースカーと末端にヒンジ・フラクチャーが確認される。長さ3.6cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmを測る。**70** 黒曜石製の縦長剥片で、自然面を打面とし、表面には複数の剥片剥離痕や左斜方向からの剥離痕が観察される。裏面にはバルバースカーと末端にヒンジ・フラクチャーが確認される。長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。**71** 黒曜石製の縦長剥片で、自然面を打面とし、表面には縱方向と左側縁から90°異なる方向の剥離痕が加えられ、裏面にはバルバースカーと末端にヒンジ・フラクチャーが確認される。長さ3.7cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmを測る。**72** 黒曜石製の三角形状を呈す幅広剥片で、自然面を打面とし、表面及び裏面の剥離がともに斜軸状を呈す。左側縁に自然面を残し、頂部に加工痕が観察される。長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmを測る。**73** 黒曜石製の剥片で、自然面を打面とする。長さ2.2cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。**74** 黒曜石製の幅広の剥片で、自然面を打面とする。長さ2.4cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmを測る。**75** 玄武岩製の縦長剥片で菱形状を呈す。表面に三条の剥片剥離痕が認められる。長さ3.5cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを測る。なお、玄武岩製の石核**43**から取れる剥片は大型であり、当資料を含め**41**・**42**

の資料とは異なるため、さらに小型の石核の存在が想定されよう。**76** 砂岩製の小型(手持ち)砥石で、右側を大きく破損する。裏面及び側面を使用しており、欠損部も含め四面使用と考えられる。長さ4.0cm、幅2.2cm、厚さ1.1cmを測る。**77** 石製鋤車で、側面の葉理より薄く剥がれており、質感等を含め石材は頁岩質砂岩と考えられる。径4.0cm、厚さ0.2cm以上、孔径0.62cm測る。**78**～**82**は石製の投弾と考えられる。いずれも河川の円礫を使用しており、平面形が梢円形で頭部あるいは両端が尖り気味となっている。断面形の多くは梢円であるが円形も存在する。**78**の長さ4.6cm、幅3.6cm、厚さ2.3cmを測るが、いずれも長さ4.5cm前後、幅3.5cm前後とほぼ同じ大きさである。石材は安山岩、砂岩、片岩が使用される。

ピット及び表探の遺物(第10図)

83 砂岩製の砥石でピット内より検出。現状では表面の一面のみ使用が確認される。特に、上半には幅0.2cm幅の粗い条線が、約5本単位で付けられており、重複する部分も存在する。残長12.4cm、幅8.0cm、厚さ4.2cmを測る。**84**は砂岩製の磨石で、表探。形状は梢円形であるが、断面は不整形を呈しており、本来は偏平體であったと考えられる。擦痕は前面に見られるが、表裏両面に残る剥離痕が特徴的であるが、自然か人口によるものかは不明である。仮に人為的剥離であれば、石斧等の再利用も考えられる。長さ12.1cm、幅7.7cm、厚さ3.8

cmを測る。

横穴墓の玄室において床面、右側壁、奥壁の一部が残るのみであるが、大形でしっかりした構造と考える。平面形は方形を基本とするが、右側壁部のラインが玄門側にわずかに狭くなる。床面は平坦で敷石、排水溝、棺床等は存在しない。側壁は直線的であるが、床面から約0.3mの立ち上り部分まではわずかに開く。したがって、奥壁の右のラインも同様な立ち上がりの形状を呈す。なお、奥壁は床面から高さ1.1m辺りで内側にカーブしており、軒先を示すラインと考えられる。残存部において

長さ1.35m、幅0.85cm、高さ1.15m、床面の標高は9.85mを測る。

ST1出土遺物(第12図)

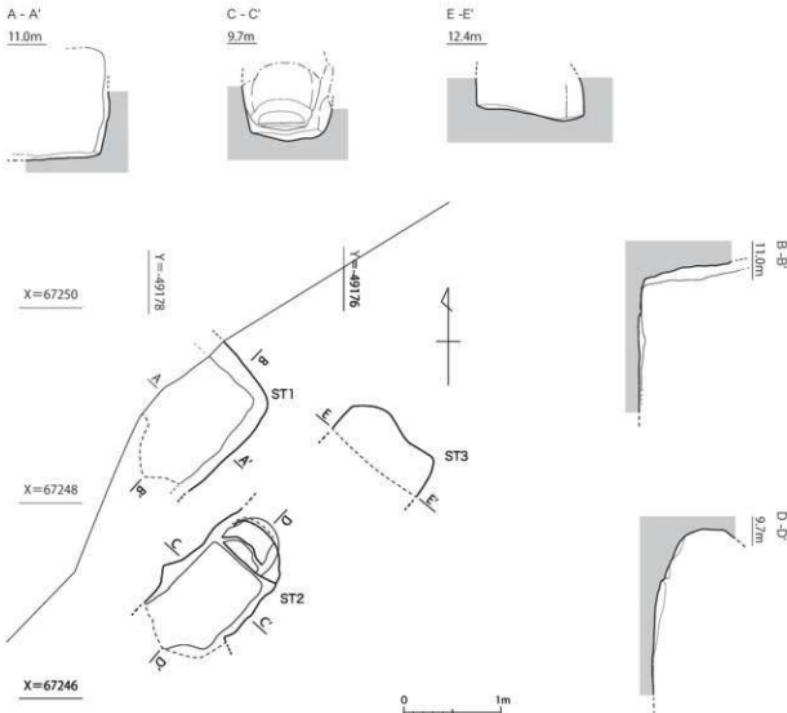
1 須恵器甕の体部下半部片で、外面の平行タタキメは方向を変え重なっており、内面当具痕の青海波もまた重なる点から、小型甕の底部付近であろう。2 上師器の杯身で、立ち上りは直線的で長い。体部との境に受部の段がわずかに見られ、内面は屈曲して稜線状を呈す。調整は内面に横位のミガキが観察される。口径13.0cm、残高4.3cm、最大径14.5cmを測る。

古墳時代の遺構と遺物

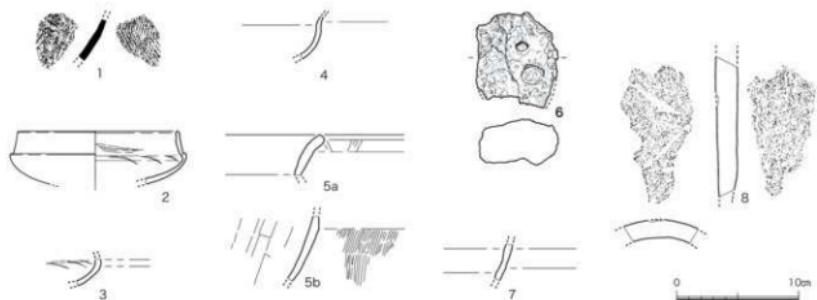
ST(横穴墓)

検出総数は4基で、丘陵西側斜面に三段に築かれる。いずれも後世の削平のため主に玄室部の一部のみの検出に止まる。

ST1(第11図)



第11図 ST1～ST3平面図、断面図(1/50)



第12図 ST出土遺物(1/4)

色調は黄橙色、焼成は不良で軟質。3 土器杯身の体部片、2より厚みがあり内面に横位のミガキが観察される。色調は橙色。

ST 2(第11図)

長方形の窓道部先端に、わずかに玄室が掘り込まれた小型の横穴墓である。窓道の残存部において、床面の長さ 1.17 m、幅 0.72 m、左側壁高 0.9 m、右側壁高 0.6 m、床面の標高は 8.7 m を測る。玄室は平面形が半円状で立面はドーム状を呈す。奥行 0.4 m、幅 0.5 m、0.6 m 以上となる。玄門部は 0.1 m 程の段差が設けられ、さらに、奥壁間に弓なりの平坦地と 0.05 m 程の段差が設けられている。

遺物(第12図)

4 土器鉢の体部片で、屈折した頸部と渦曲した体部を呈す。風化のため調整は不明。残高 3.4 cm をばかり、色調は橙色、焼成は不良で軟質。5 土器甕の口縁部片(a)と体部片(b)で同一個体と考えられる。口縁部(a)はくの字状を呈して外反し、調整は外面

に縦位のハケメの後に横位のナデが加えられ、内面には横位のナデが施される。体部(b)は下半部と考えられ、調整は外面に縦位のハケメが、内面には縦位のヘラケズリが施される。色調は橙色で、焼成は良い方であろう。6は鉄滓で火をく。残長 7.3 cm、幅 6.5 cm、厚さ 3.5 cm を測る。7、8は横穴墓の窓道部埋土中に混入していたものである。7は須恵器陶器の壺部片と考えられる。内外両面に横ナデがしっかりと施されており、色調は灰黄褐色、胎土、焼成とともに良好である。8丸瓦片で焼してある。表面調整は風化のため不明であるが、内面は不鮮明ながら布目が観察される。

特に、7、8の資料は、玄門が砂質土により丁寧に閉塞された上部より得られている。一見、閉塞全体が一度に積まれた状況であったが、観察すると上部は一度開けて再び丁寧に閉じた状況が見受けられた。それを当初は追葬と考えたが、玄室は非常小さく追葬に供するスペースの確保も困難で、中世以降の遺物が混入していたことから、何らかの理由で、窓道を含め埋め戻したものと考えてい

る。なお、ST1 の調査時にも、通常の埋土ではなく全体を黒色土と赤色土で、丁寧に交互に積んだ版築状の埋土を確認しており、中世の頃で触れるが盛り土構築や建物群等の構築に関連すると考えている。

ST 3(第11図)

小形横穴墓の玄室のみ検出。立面形態はドーム状を呈すと考えられるが、天井部については中世の盛り土構築に伴い削平されており、標高 12 m 前後が中世盛り土の底面に相当する。床面は左半分がやや高くなる。残存部の床面奥行 0.5 m、幅 1.1 m、右側壁高 0.4 m、左側壁高 0.24 cm、床面の標高は 11.6 m を測る。遺物は未検出。

ST 4(第3図参照)

小形横穴墓の玄室のみ検出。平面形は隅丸の長方形状を呈し、側壁はやや開き気味に立ち上るが、奥壁は垂直に近い。残存部の床面奥行 0.5 m、幅 0.35 m、高さ 0.3 m、床面の標高は 10.25 m を測る。

中世の遺構と遺物

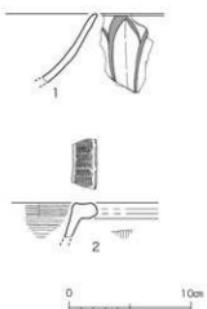
SB (掘立柱建物)

SB 1(第13図)

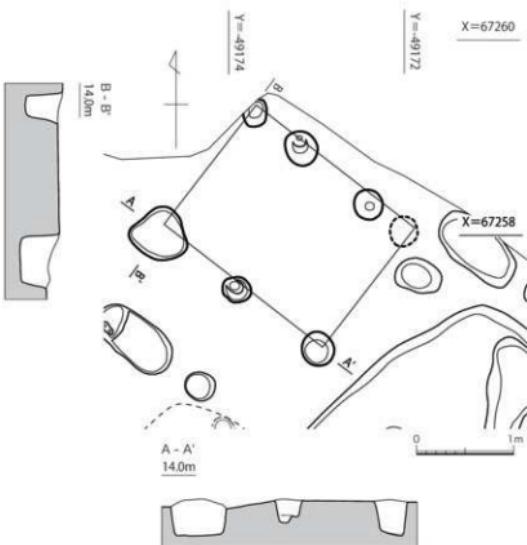
1間×2間を基本とするが、南側梁行の西側柱穴が未検出なため、仮に点線部分に設定すると、西側の桁行間は2間、東側は3間となる。そうでなければ、南側の梁行に少し柱筋の通りが悪い建物となろう。桁行2.0m、梁行1.55mほどの小規模な建物である。

SB1 出土遺物 (第14図)

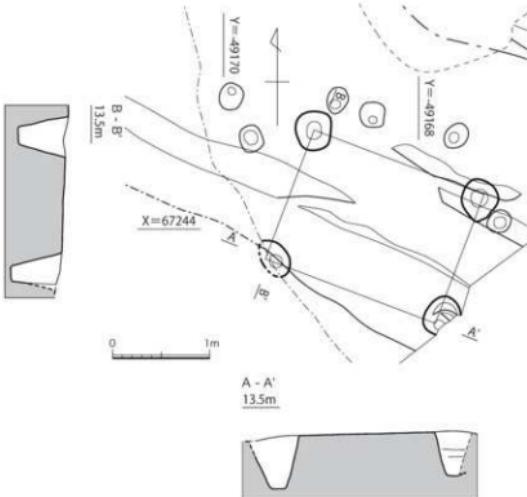
1 青磁楕の体部片で、龍泉窯系。外面には弁の中心線が稜線となる鎌蓮弁文を配す。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色を呈す。2 土師質鍋の口縁部片で、厚みのある逆L字形口縁を呈し、上部にL(1段)の原体を絡条体にして時計回りに連続的に押圧する。調整は外面に縱位のハケメが、内面には横位のハケメが施される。



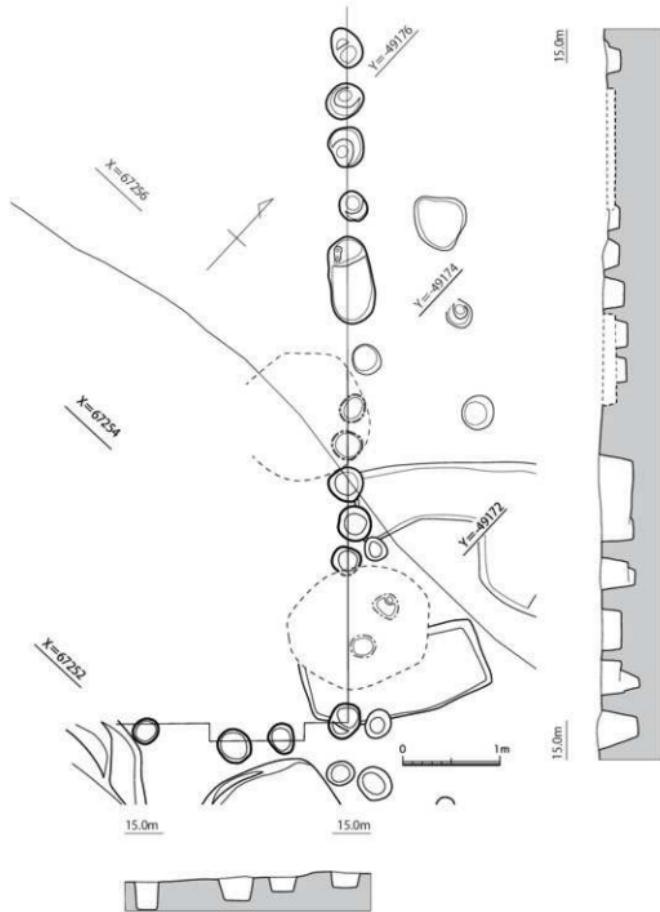
第14図 SB1 出土遺物(1/4)



第13図 SB1 平面図、断面図 (1/50)



第15図 SB2 平面図、断面図 (1/50)



第16図 SA 平面図、断面図 (1/50)

SB 2(第15図)

調査区西側端部の平場に設けられた建物で、1間×1間の規模を有し、桁行1.80 m、梁行1.35 mを測る。当地点は、調査区西側で確認した、弥生時代の環濠土層図(第5図)1～4層が、中世に造成された平場の堆積層である。

その4層下に延びるラインが、斜面を削平して造成した平場となっている。遺物の検出はない。

SA(柵)(第16図)

調査区の北側から南に向かって7mほど延びており、そこから、約90°西側に角度を変え2.4mほ

ど延びて途切れる。そこは、調査区の西側を南北に走るSD1の北端に相当しており、両者は連続しており西側に対する防備の機能を有したものと考える。柱穴は多くが径0.3～0.4mのもので、柱間の間隔も非常に狭く互いに接するようになつておらず、柵といいうよりは柵の頃かもしれない。遺物の

検出はない。

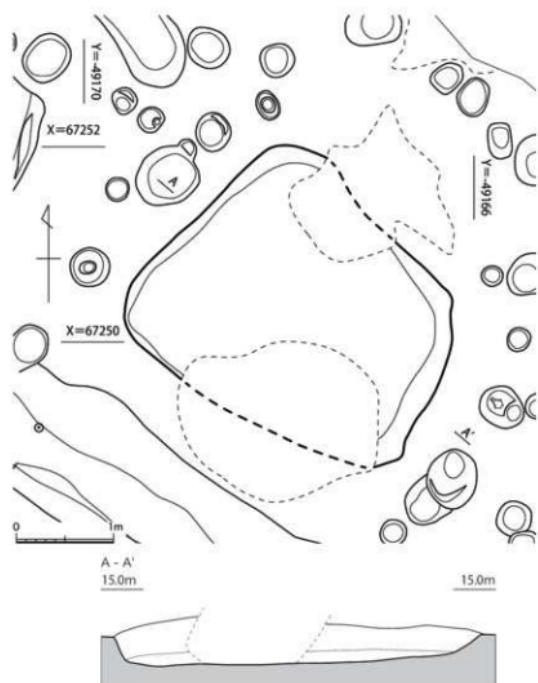
SK(土坑)

SK1(第17図)

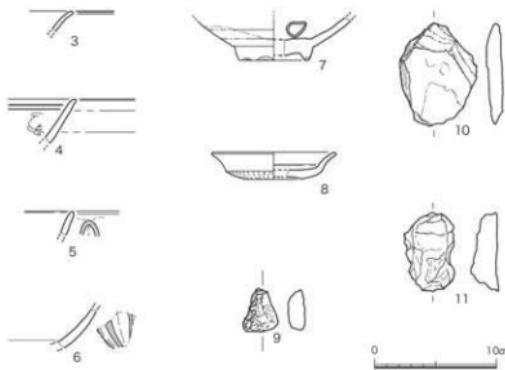
平面形は開丸方形状を呈すが、東西両側の側面を立木に大きく切られている。長さ3.0m、幅2.5m、深さ0.32mを測る。

SK1出土遺物(第18図)

3 白磁皿の口縁部で、断面形が方形の口縁端部から内面にかけて、釉を剥ぎ取った口禿となってい。色調、胎土ともに灰白色を呈す。4 青磁碗の口縁部で、龍泉窯系。外面は無文、内面の口縁部付近には二条ス線を配し、その下方に細い線で飛雲文を描いている。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色を呈す。5 青磁碗の口縁部片で、龍泉窯系。外面には弁の中心線が稜線となる鍋蓮弁文を配す。色調はオリーブ黄色、胎土はともに灰白色を呈す。6 青磁碗の体部片で、龍泉窯系。外面には弁の中心線が稜線となる鍋蓮弁文を配す。色調はオリーブ灰色で釉にヒビが多い。胎土は灰白色を呈す。7 青磁碗の底部片で、同安窯系。内面の見込上部に円形の片彫文様を描く。体部下部は直線的に開き、回転ヘラカズリによる調整が観察される。高台は断面形が逆三角形状を呈し、底部は円錐状の厚底となる。外面の釉は体部下辺付近で止まる。色調はオリーブ灰色、胎土は明オリーブ灰色を呈す。底径5.7cmを測る。8 青磁の皿で同安窯系、口縁部は外反し、体部は屈折して上げ底の底部へと続く。屈折部の外面は稜線となり、内面の見込は段をなしている。底部外



第17図 SK1平面図、土層図(1/50)



第18図 SK1出土遺物実測図(1/4)

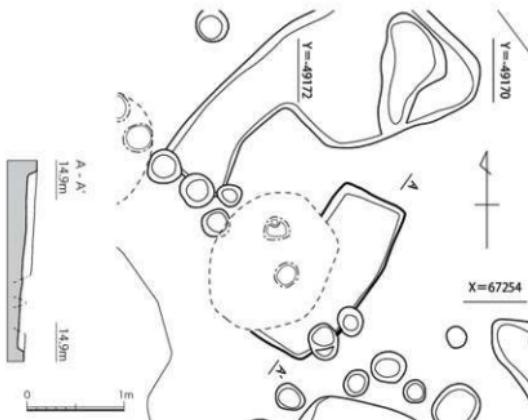
面付近には、横位方向のヘラケズリが観察される。色調オリーブ黃色、胎土は灰白色を呈す。口径10.2cm、器高2.2cm、底径4.6cmを測る。9滑石製の未製品で、形状は二等辺三角形状を呈すが完成品は不明。全体に厚く丸味を帯びる。頂部から左側縁に加工痕があり、全体に粗く研磨されている。長さ3.5cm、最大幅2.9cm、厚さ1.4cmを測る。10、11はともに滑石の原材で、10は板状を呈し、11は周縁に粗い加工が加えられている。10は長さ8.4cm、幅6.2cm、厚さ1.3cmを測る。11は長さ6.5cm、幅4.1cm、厚さ2.1cmを測る。

SK2(第19図)

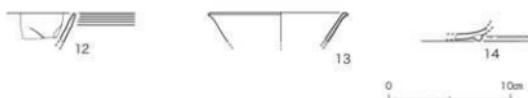
平面形は長方形状を呈すが、片側の側面をカクランにより大きく切られている。長さ1.85m、幅0.8m、深さ0.07mを測る。

SK2出土遺物(第20図)

12 青磁碗の口縁部片で、龍泉窯系。やや尖り気味の直口口縁を呈し、外面に横位の柳目を入れ、内面には片彫文様が観察される。色調は灰オリーブ色で釉に細かいヒビがあり、胎土は灰白色を呈す。13 青磁杯の口縁部片で、嘴状の口縁端部上面が凹面をなす。全体に釉が厚めにかかり、色調は灰オリーブ色、胎土は灰白色を呈す。口径12.0cm、残高2.4cmを測る。14 瓦器碗の底部片で、高台は低く丸味を帯びる。底部切り離しは回転系切と見られるが不鮮明である。



第19図 SK2 平面図、断面図(1/50)



第20図 SK2 出土遺物(1/4)

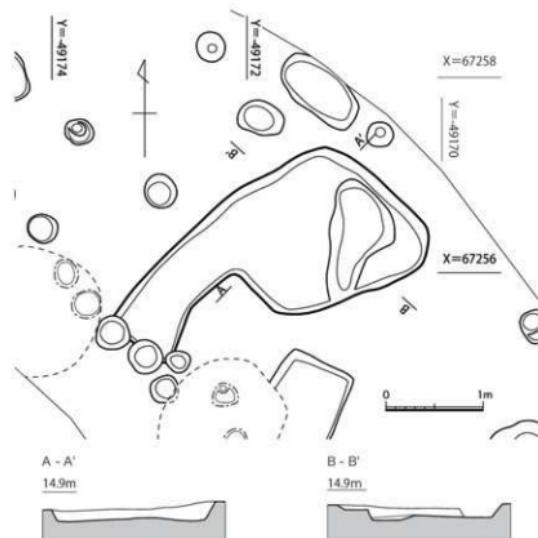
SX1(不明遺構)(第21図)

形状的には方形と長方形の土坑を組み合わせた(SK1とSK2)ようでは不整形である。規模は最長で3.0m、方形部分の幅1.67m、長方形部分の幅0.6m、深さは0.1m～0.15mを測る。

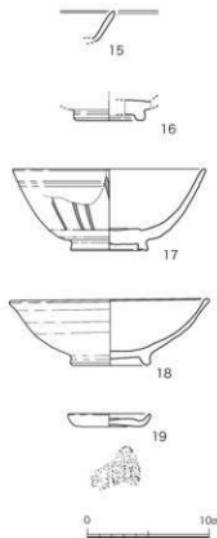
SX1出土遺物(第22図)

15 白磁盤の体部片で、口縁部はやや厚く直線的に開き、体部下方で大きく屈折する。口縁端部の釉は搔き取られており禿を呈す。色調、胎土とともに灰白色を呈し、残高2.5cmを測る。16 青磁碗の底部片で、龍泉窯系。内面の見込は弱い段をなす。高台は厚みがあり、底部はやや厚底を呈す。色調はオリーブ黄色、胎土

は灰白色を呈す。底径5.9cmを測る。17 青磁の椀で、口縁端部を丸く納め、体部は丸味を帯びて全体に厚めである。体部下方は回転ヘラケズリが施され、高台は若干外側に張る。内面の見込はしっかりと段になる。外面には片彫の蓮弁文を配すが弁の中心線に錦はない。色調はオリーブ色、胎土は灰黄色で黒色粒子を少し含む。口径15.8cm、器高6.7cm、底径6.3cmを測る。18 土師器の椀、もしくは高台付杯で、瓦器椀のつくりと似る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は若干肥厚する。体部は丸味を帯び、高台は高さと幅があり、外方に張り出す。色調は浅黄橙色、焼成は不良で軟質。口径16.4cm、器高5.4cm、底径6.1cm、高台高0.7cmを測る。19 土師器の小皿と考えられ



第21図 SX1 平面図、断面図 (1/50)



第22図 SX1 出土遺物 (1/4)

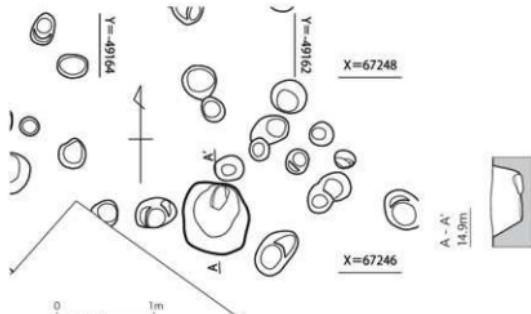
る。部は丸味を帯び、底部の切り離しは回転糸切底である。口径 6.6cm、器高 1.1cm、底径 5.3cm を測る。

Pit1(第23図)

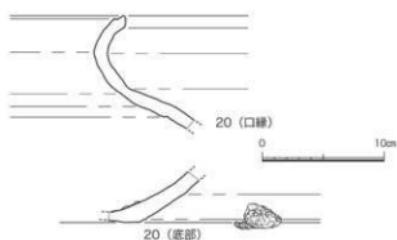
形状は隅丸方形状で、底部には東側に寄せて礎板状の石を据えており、柱穴と考えられる。遺物の陶器は、底部の礎板状石の西側にまとめられており、地鎮に伴う可能性があろう。長軸長 0.37 m、短軸長 0.33 m、深さ 0.16 m を測る。

Pit1 出土遺物 (第24図)

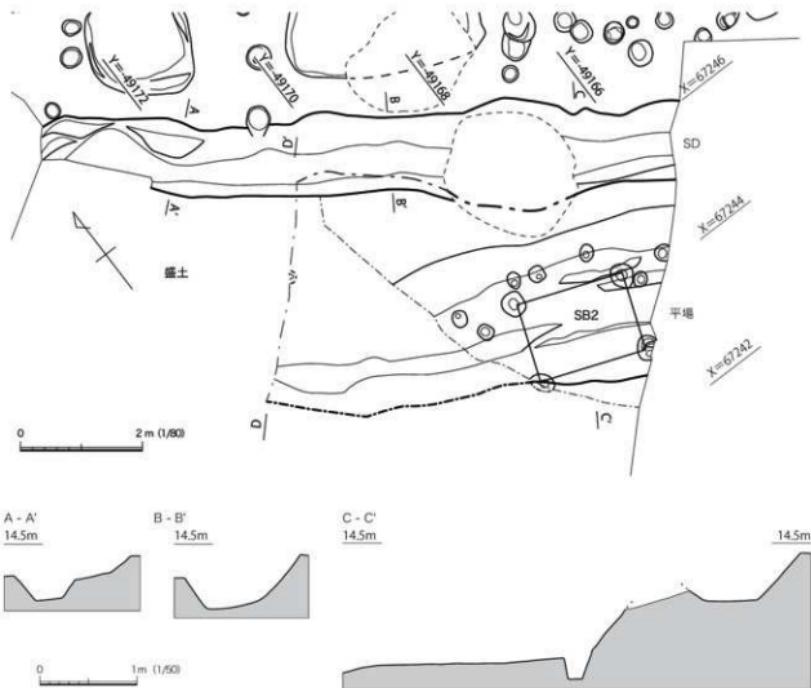
20 常滑焼(陶器) 振の口縁部及び底部の破片である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は短い垂直面をなして、その上面に凹線を一条配す。口縁部と頭部に屈折面



第23図 Pit1 平面図、断面図 (1/50)



第24図 Pit1 出土遺物 (1/4)



第25図 SD、盛り土状遺構、平場平面図(1/80)、SD、平場断面図(1/50)

があり、肩部はなで肩を呈して外方へと大きく張り出している。軸は口縁部内面の上部と外面上部の屈折面から下方に施されている。底部は胸部に向けて大きく外反しており、底面はやや上げ底になる。一部に焼成時の粘土塊が残る。調整は口縁部の施釉のない外面と内面については横ナデが観察される。色調は緑黄色で、露胎は赤褐色を呈す。軸は自然の灰釉と考えられ、底部内面にも厚く溜まっている。胎土は灰黄色で石英の細礫を多量に含んでいる。

SD(溝状遺構)(第25図)

調査区西側で検出された溝状遺構であるが、先のSAの所でも記したが、柵と当遺構は丘陵の西部を意識しており、北側に柵、南側に溝状遺構を設け、後者に横堀の機能を持たせていたと考えている。なお、溝の西側に沿って犬走り程度の平坦面が存在する。全体に大きく削平されて平坦となるが、本来は盛り土を行ない土壙として存在したか、あるいは犬走りとして機能していた可能性を考えたい。現状で確認できる溝の長さは、10.4 mで北側は柵(SA)と接する箇所で閉じている。南側には

さらに延びると考えられ、地形の窪み等から考えて残丘の先に及ぶと想定している。断面形は逆台形を呈しており、C-C'において、溝と平場の間の約0.7 m部分が土壙、あるいは犬走りと考える部分である。なお、削平は畠地の開墾によるものと考えられ、当溝状構に掘り込まれたカクランは、堆肥場として利用されている。

SD出土遺物(第27図)

21 白磁梶の口縁部で、断面三角形の嘴状を呈し、色調、胎土ともに灰白色を呈す。22 青磁梶の体部で、龍泉窯系。外面は無

D - D'

14.4m

14.0m

13.5m

13.0m

12.5m

12.0m

11.5m

14.4m

14.0m

13.5m

13.0m

12.5m

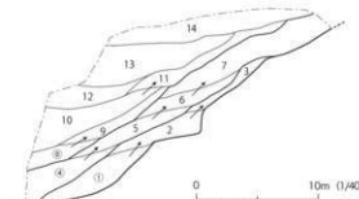
12.0m

11.5m

0 5m (1/30)

調査
成果

- A 赤 土 盛 土
1. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 赤色土 (10R5/8) 及び赤灰色土 (10R6/1) ブロックを含む
 2. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 赤色土 (10R5/8) 及び赤灰色土 (10R6/1) ブロックを含む
 3. にぶい赤色土 (2.5YR5/3) 赤灰色土 (10R6/1) を多く含む
 4. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 赤灰色土 (10R6/1) を含む
 5. にぶい橙色土 (2.5YR6/3) 淡赤褐色土 (2.5YR7/4) のブロックを含む
 6. にぶい橙色土 (2.5YR6/3) 赤灰色土 (10R6/1) ブロックを含む
 7. 橙色土 (2.5YR6/6) 赤灰色土 (10R6/1) 淡赤褐色土 (2.5YR2/4) それぞれがブロック状に混在する
 8. にぶい橙色土 (2.5YR6/3) 及び明赤褐色土 (2.5YR5/6) がそれぞれブロック状に混在する
 9. 橙色土 (2.5YR6/6) に橙色土 (5YR2/6) がブロック状に含まれる
 10. 灰褐色土 (5YR6/2) に橙色土 (5YR7/8) の小ブロックが含まれる
 11. 橙色土 (2.5YR6/6) に橙色土 (5YR7/6) のブロックが含まれる
 12. 赤色土 (10R5/6) に赤灰色土 (10R6/1) のブロックが含まれる
- B 灰褐色盛土（全体的にかたく締まっている）
- a. にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 橙色土 (2.5YR6/6) ブロックを少し含む
 - b. にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 橙色土 (2.5YR6/6) ブロックを含む
 - c. にぶい橙色土 (7.5YR7/4) 橙色土 (2.5YR6/8) ブロックを含む
 - d. 灰褐色土 (7.5YR6/2)
 - e. 灰褐色土 (5YR6/2) 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) を少し含む
- C 墓塚埋土（全体的に硬く、しまりが強い）
- i. 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 石英粒を多く含む
 - j. にぶい灰褐色土 (2.5YR5/4) にぶい橙色土 (5YR6/4) を多く含む
 - k. にぶい橙色土 (2.5YR6/3) 石英粒と橙色土 (2.5YR6/8) を多く含む
 - l. 反褐色土 (5YR6/2) ピット覆土
 - m. にぶい橙色土 (2.5YR6/3) 炭化物を含む ピット覆土



模式図番号、土層図番号対応

- | | |
|------------|----------------|
| ①, s, t | ⑧, i, j, k |
| 2, q, r | 9, c, d |
| 3, m | 10, 10, 11, 12 |
| 4, n, o, p | 11, 8, 9 |
| 5, i | 12, 6, 7 |
| 6, h | 13, 3, 4 |
| 7, a, b, g | 14, 1, 2 |

第26回 盛り土遺構土層図 (1 / 30)、盛り土遺構模式図 (1 / 40)

文か、内面には片影の文様が描かれる。色調はオリーブ黄色で、釉に細かなヒビが観察される。胎土は灰白色を呈す。**23 青磁小椀**の口縁部片で、龍泉窯系。輪花で内面に白堆線による区分けが観察される。色調は明緑灰色で、胎土は灰白色を呈す。

盛り土状遺構(第25、26図)

調査区西側の崖面で検出されたST3は、墓群の最も高所に位置し、弥生の環濠を西側から掘り抜き構築されている。そこは、環濠下層の埋土(真砂土)が非常に硬く堆積した部分で、崖面の横穴墓断面は玄室の天井部が失われ、盛り土と見られる灰褐色土層と赤色土層が丘陵上まで堆積する状況が確認された。観察の結果、これは丘陵西側における盛り土状遺構の構築に際し、横穴墓天井部が削平されたと判明した。なお、標高12m前後が中世盛り土の底面に相当する。検出された盛り土は、高さ約1.6m、幅2.6mで、ST3の位置とカットされた標高を考慮すると、高さ2.15m、西側への幅は4mほどにならうか。丘陵上の削平を加味すれば高さは増すものと考える。検出した土層を観察すると、1~12層の赤色土を上層とし、a~t(20層)の灰褐色系を下層として32層に区分される。それを環濠南側の土層図(第5図)6~14層と比較すれば、環濠内の自然堆積とは大きく異なる事が理解出来よう。環濠南側の平場では、構築のため斜面側を約50°の傾斜をもつて約1mの深さまでカットし、その後、低い西側の地山面までを含めて平坦にして、必要な面積を確保している。北側の盛り土状遺構の構築では、まず、東側

から約25°~35°の傾斜で削るが、途中で緩やかな段を設け1mほど進む。そこから、垂直に0.2mほど段カットした後、ほぼ水平に0.4mほど進んでから、再び、傾斜を30°~40°として0.5mほど進み、そこから、ほぼ水平に0.5mほど進むが、その先は不明となる。これまでの工程では、傾急の差はあるものの、西側に0.5m前後削ったら、傾斜を変えて段を設けており、中間では明確な段カット(r層)が見られる。検出した土層の西端から、先のST3天井部のカット面との高差が0.55m、距離は1.3mほどであろうか。少なくとも途中に1ヶ所の段差を設けて削っているものと考えられる。

次に、盛り土の方法であるが、32層を一定程度単位にまとめ模式図で示すと、先の西側斜面の削平後、①→2→3の順に灰褐色土を積み上げ、①と2、2と3の土層ラインは短いスパンであるが、ほぼ水平に積み上げて補強するものと考える。次に④→5→6→7と順に積まれるが、④と5、5と6、6と7の何れの土層ラインも、当初の①~3に比べるとかなり長いスパンの緩傾斜面をもって、下層及び上層は基より①~3とも接することとなり、接地面積を大幅に増大させることにより接着の強度を高めている。まず①~3の関係において、地山面を段状に削て下段を水平とし、盛り土の安定を図る。同様に上層との接地面も水平とするが、その際に接地面を小さくして④~7との接地面の傾斜を長く取り緩傾斜とする。次に、④~7は①の斜面下方より緩やかな傾斜面に沿って、上層との接地面を水平に近づけながら5~7を積み上げており、断面形が横長の菱

形を斜めに積み上げた形状となる。つまり、①~14の全てが、持ち送り式的に積み上げられた様相を呈している。また、7、9この灰褐色層を土台として、赤色土の10~14を積んでいくが、傾斜は30°前後であり、12~14は水平に積み上げられている。また、灰褐色土層と赤色土層の区分理由は判然しないが、土層を削る際に前者はかなり硬くしまっており、傾斜面でも安定して崩落しにくいと考えられる。後者は全体にもろく、細かく碎けやすい性質で、傾斜面の止めには前者に向いているものと考えられる。ただし、丘陵上は赤色土が豊富であるが、灰褐色土は丘陵外に求める必要があろう。したがって、盛り土下方の基礎に灰褐色土を使用し、基盤を整えた上に豊富な赤色土を盛り上げたものと考える。ただし、この盛り土状遺構が何のために築かれたのかは判然とせず、土壌状の遺構や土地の利用区画を西側に広げたといった解釈が考えられる。なお、盛り土内には土師器の小皿と見られる粗片が含まれており、調査区内検出の中世の建物遺構等との関連が考えられる。

平場(第25図)

弥生環濠の南側土層、中世のSB2、SD、盛り土状遺構の箇所で触れているが、調査区の西端に位置しており、傾斜面を1mほど削平して設けた平地である。そこにはSB2の掘立柱建物が建ち、その東斜面側には、斜面と平地の境となる地形変換点上に7基のピットが存在している。これは建物の正面を西側とすれば、その後方に位置する柵状の施設と考える。つまり、建物と柵と丘陵上

の建物群の西側防護の一端を担っていると考える。ちなみに、これを突破すれば、後方は土壁もしくは犬走り状の土手と横堀状の溝が控えていることになる。なお、丘陵上から1mほど下がる当地点の特徴から、多くの遺物が流れ込む、あるいは、廃棄されているようで、特に、青磁を中心になりの資料が得られている。

平場出土遺物(第27、28図)

24 白磁碗の口縁部片で、肉厚の玉縁口縁を呈し、釉が少し垂れる。色調は灰白色、胎土も灰白色を呈すが、黒色粒子を含み粗悪で気泡も多い。25 白磁碗の口縁部片で、口縁端部は上端が平坦で鋭い嘴状を呈し、直下にナデによる明瞭な後線を有す。色調は浅黄色で、釉は厚くかかり表面に細かなヒビが見られる。胎土は灰白色を呈す。26 白磁の碗で、口縁部は若干丸味を帯びた嘴状を呈し、体部はやや厚く直立気味に立ち上がる。内面の見込みは少し高い位置にあってライン状を呈す。色調はにぶい橙色、胎土は橙色からにぶい橙色を呈しており、釉は体部中ほどから一部高台付近にかかる。全体に二次焼成を受けたのか、粗悪で釉がカサカサの粉末状の箇所が存在する。口径16.0cm、器高7.5cm、底径6.6cm、高台高0.7cmを測る。27 白磁碗の体部片で、若干丸味を帯び、見込みラインはやや下方にあって、釉は高台との境付近までかかる。色調、胎土ともに灰白色を呈す。28 白磁碗の底部片で、内面には線彫のラインが観察され、見込みは底近くに位置して段をなす。体部下半はやや厚みがあり、底部は下方に円錐状を呈して厚底気味だが、高台は厚

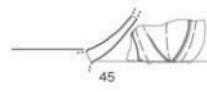
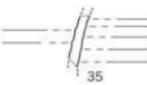
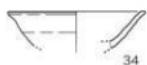
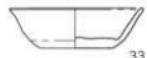
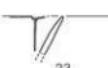
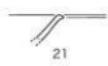
さ0.3cmと薄手で直立する。色調、胎土ともに灰白色を呈す。残高3.0cm、底径6.2cm、高台高0.7cmを測る。29 白磁碗の底部片で、高台との境に削りの段が見られ、内面の見込みは観察されず、高台は厚くしっかりと立つ。高台高0.8cmを測る。色調、胎土ともに灰白色を呈し、釉は内面にかかるものの、外面上には見られない。

30 白磁碗の底部片で、体部下半は丸味を帯び、内面の見込みは沈線状を呈す。底部中央はやや厚く、高台は低めの方形で厚さ0.8cmと厚く力強い。色調、胎土ともに灰白色を呈し、底径5.5cm、高台高0.5cmを測る。31 白磁皿の体部上半部片で、口縁部は外反し、口縁端部はやや丸味を帯びた嘴状を呈す。体部下方の露胎部は、墨等で黒く塗りつぶされる。色調は灰白色、胎土は白色で良質。口径9.4cm、残高1.3cmを測る。32 白磁の皿で、口縁部はわずかに外反し、全体が屈折気味に内湾する。内面の見込みは凹線状をなし、平底の底部は中央が窪む。内底にヘラによる草花文が描かれる。色調は灰黄色で釉に細かなヒビが入る。胎土は浅黄色で気泡が多い。底面の釉は搔き取られており、墨書きが観察される。なお、文字については説解不可。口径11.0cm、器高2.0cm、底径4.4cmを測る。33 白磁の皿で、口縁部は直線的に外反するが、やや歪みがあり左右対称ではない。口縁端部の釉は搔き取られ口禿となる。平底で丸味のある底部は、0.9cmと厚底気味である。色調は空色を帯びた灰白色を呈し、釉はやや厚めで、胎土は灰白色呈し、良質である。口径11.0cm、器高3.3cm、底径5.8cmを測る。34 白磁皿の体部片で、口縁部は外反し、口縁端部

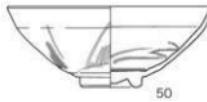
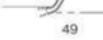
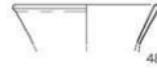
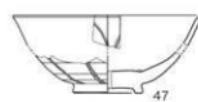
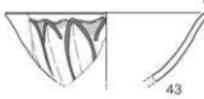
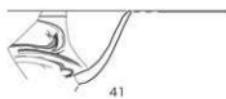
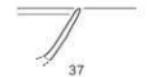
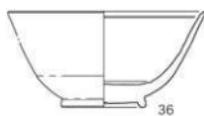
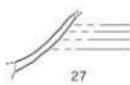
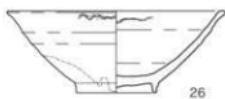
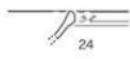
を丸く収め、釉は搔き取られて口禿を呈す。色調は空色を帯びた灰白色を呈し、釉はやや厚めで、胎土は灰白色呈し良質である。口径11.4cm、残高3.0cmを測る。

35 白磁壺の頸部片か。内外の両面ともに、回転のナデによる稜線が明瞭に隆起する。色調は透明感のある灰白色で、胎土も灰白色の良質を呈し、上質の製品と考えられる。36 青磁の碗で、龍泉窯系。口縁部は直口氣味で、腰が張り重心が低く、内面の見込みは段をなす。内外の両面ともに無文を基本とするが、口縁部内面に一条の沈線を配す。底部は1.5cmと厚く、高台は方形で内部のくりが浅い。色調はオリーブ灰色、胎土は橙色部分が下半に広がり、気泡が多い。口径16.2cm、器高7.9cm、底径7.0cm、高台高0.9cm、内面は0.3cm～0.4cmを測る。37 青磁碗の口縁部片で、龍泉窯系。口縁部はやや肉厚で直口する。基本は無文だが内面に一条の沈線を配す。色調は透明感のある明オリーブ灰色で、釉に細かなヒビに入る。胎土は灰白色を呈す。38 青磁碗の底部片で、龍泉窯系。体部下方は丸味を帯び、無文と考えられる。底部は1.5cmの厚底で、内部のくりは浅い。色調はオリーブ灰色、胎土は褐色を呈す。39 青磁碗の底部片で、龍泉窯系。全体に厚みがあって安定しており、内面の見込みは浅い段をなす。釉は高台までかかり、高台下に砂目が三か所確認される。内面の見込みの上部と内底に柳目文と片彫蓮華文が観察されるが、花文は三單位か。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色に黒色粒子を少し含む。底径6.0cm、残高2.5cm、高台高0.8cmを測る。40 青磁碗の底部片で、龍泉窯系。体部への屈折はやや弱

SD1 出土遺物



平場 出土遺物



第27図 SD、平場出土遺物(1/4)

く、内面の見込みは浅い段を呈す。釉は高台までかかり、底部は厚みがあつて、方形の高台が安定感を示す。内底には花文(蓮華文か)が描かれている。色調オリーブ灰色、胎土はにぶい黄橙色で細かな気泡が多い。底径 5.2cm、残高、2.5cm、高台高 0.9cm を測る。

41 青磁椀の体部片で、龍泉窯系。体部は緩やかなラインを描いて外反し、口縁端部は尖り気味となる。口縁部内面に一条の沈線を配し、その直下から大きく片彫の蓮華文を描くが、外面は無文となる。色調、胎土とともに灰白色を呈す。残高 6.1cm を測る。42 是青磁椀の口縁部片で、龍泉窯系。口縁端部は尖り気味で、口縁部内面に配した三条の沈線文を懸垂文状に分割し、直下に片彫の直線や簡略化した飛雲文を描くが、外面は無文となる。色調は灰オリーブ色、胎土は灰白色に白色の微粒子を含む。

43 青磁椀の体部片で、龍泉窯系。体部は緩やかに外反し、外面には弁の中心線が稜線となる鍋蓮弁文を配す。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色で黒色粒子や細かな気泡が含まれる。残高は 5.7cm を測る。44 青磁椀の体部片で、龍泉窯系。外面には弁の中心線が稜線となる鍋蓮弁文を配す。色調は緑がかった灰白色、胎土は灰白色で細かな気泡が多く含まれる。

45 青磁椀の体部片で、龍泉窯系。外面には弁の中心線が稜線となる鍋蓮弁文を配す。下方のラインは交わり弁先端の形状を示す。内面の見込みは段をなす。色調はやや透明感のあるオリーブ灰色、胎土は灰白色を呈す。46 索要注意の製品である。外面の文様は蓮弁文とは異なり、片彫の四線と平坦面からなる直線形状が、器面に連続する様に鍋文を連想させる。さら

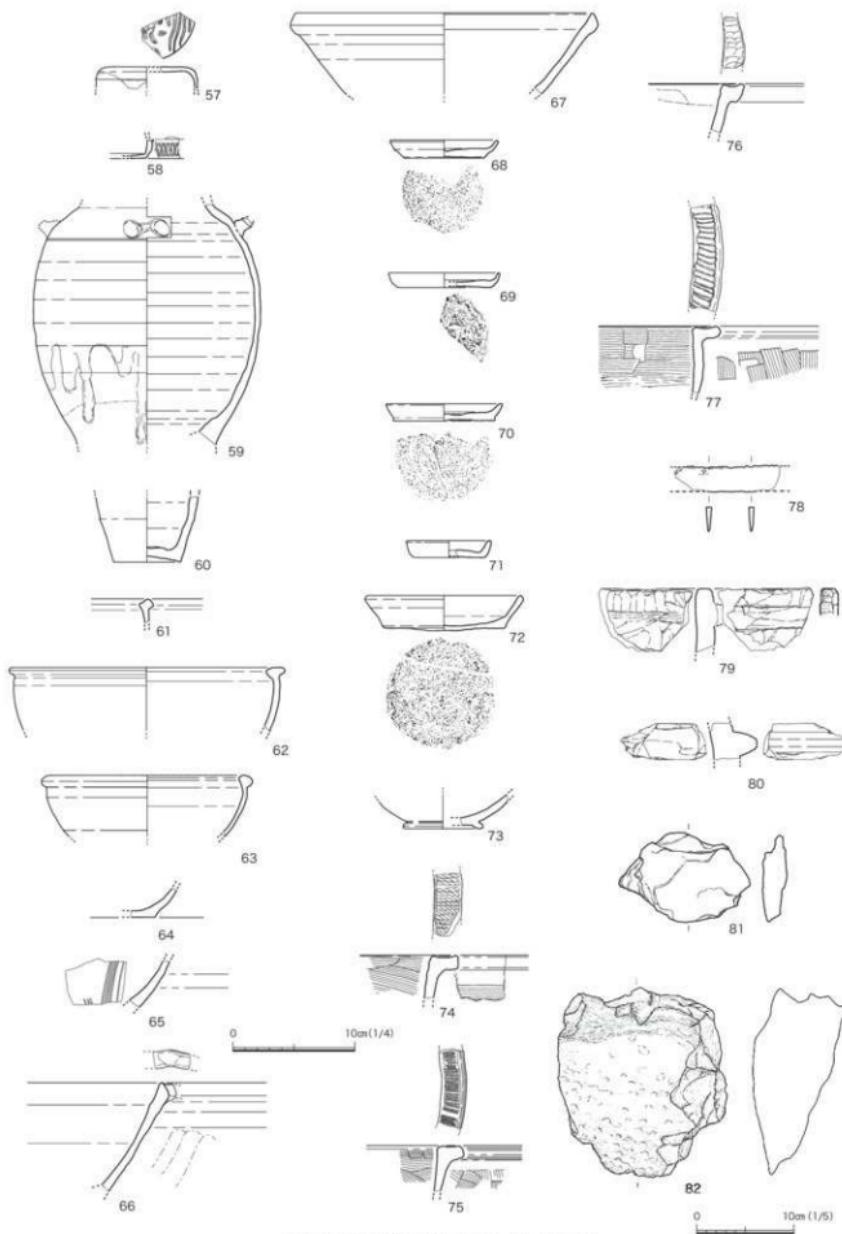
に、釉は下方で途切れ露胎となるが、内面は途切れずにかかる。色調はオリーブ黄色、胎土は灰白色に灰色の斑点が点在する。器種に関しては、壺や水差しが浮かぶものの判然としない。47 青磁の椀で、龍泉窯系。口縁部は緩やかに外反し、体部外面に片彫の蓮弁文を配すが、鍋はない。内面の見込みは段をなし、方形の高台はやや外側に張出し、底は厚底を呈す。色調はオリーブ黄色で、釉には細かなヒビがあり、胎土は淡黄色を呈す。口径 15.6cm、器高 6.4cm、底径 5.8cm、高台高 0.7cm を測る。48 青磁碗の口縁部片で、龍泉窯系。口縁部は直線的に開き、口縁端部玉縁状で上面が凹面をなす。体部下方は欠損するが、くの字状に屈折して底部に統くと考えられる。色調は明オリーブ色で、釉は厚めにかかり大きなヒビが入る。胎土は白色が強い灰白色で良質。口径 12.2cm、残高 3.3cm を測る。49 青磁皿の上半部片で、龍泉窯系。口縁部は外反し、体部が屈折する。色調は浅黄色、胎土は灰白色を呈す。残高 1.9cm を測る。50 青磁の椀で、同安窯系。口縁部は緩やかに屈折し、底部は逆円錐形に突出して、幅広方形の安定した高台が付される。体部外面には細い櫛目やヘラによる直線を描き、内面の口縁下には沈線を一条配し、その下に略花文や櫛によるジグザグの点描文を施す。色調は灰オリーブ、胎土は灰白色で石英粒が多く不良。口径 17.0cm、器高 6.7cm、底径 5.0cm、高台高 1.2cm を測る。51 青磁椀の体部片で、同安窯系。口縁部はわずかに屈折し、体部は緩やかに内湾する。外面は無文、内面の口縁下には沈線を二条配し、その下に略花文や櫛の点

描文を施す。色調は浅黄色で釉にヒビが多く入る。胎土は灰白色で気泡が多い。残高 4.8cm を測る。

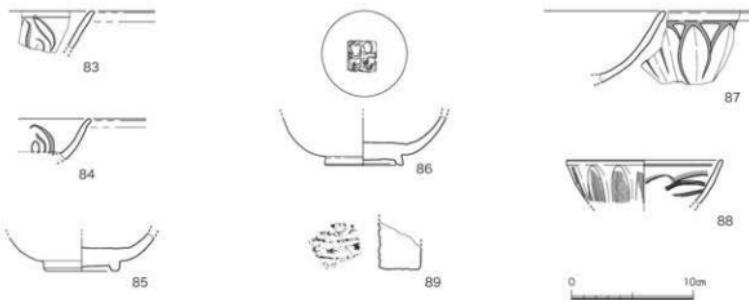
52 青磁椀の口縁部片で、同安窯系。口縁部は屈折し、外面は無文、内面に略花文が描かれる。色調、胎土とも灰白色を呈し、釉は透明感がある。53 青磁椀の体部片で、同安窯系。内外両面ともに櫛目文を配す。色調は浅黄色、胎土は灰白色を呈す。54 青磁椀の底部片で、同安窯系。細身の体部は、直線的に大きく開き、器壁は厚手となる。外面には細い櫛目文、内面にはヘラ描の花文を施す。色調はオリーブ灰色、胎土は灰白色を呈す。底部は厚底で逆円錐形を呈すが、底径は 4.3cm と小さく、高台高 0.8cm、残高 3.7cm を測る。55 青磁の杯、もしくは小椀で、同安窯系。口縁部は丸味をもって外反し、口縁端部は肥厚気味となる。外面は無文であるが口縁部付近まで回転ヘラケズリが施され、釉は底部付近までかけられるものの、下方は露胎となる。内面は櫛目文が観察される。色調、胎土ともに灰白色を呈し、口径 11.8cm、残高 3.9cm を測る。56 青磁皿の体部片で、同安窯系。体部下方が屈折し、内底の中央は窪み底部はやや上げ底となる。内底に二叉片刃の曲線と櫛描によるジグザグの点描文が施される。色調、胎土とともに灰白色を呈し、底径 5.4cm、残高 1.7cm を測る。57 青磁(青白磁か)合子の蓋片で、大型の部類に属す。浮彫り状の花文や雲文等を配しており、文様部分に化粧土の使用が考えられる。施釉範囲は蓋の外側上面部まで、内面は天井部の限られた範囲となる。色調は明緑色、文様部分は灰白色で、胎土は灰白色を呈す。最大径 8.4cm、残高 1.8cm を測る。58

青白磁合子の身片。側面に型づくりによる錦蓮弁文を一周させる。施釉は蓮弁文の中ほどまで、下方は露胎となる。色調、胎土ともに灰白色を呈す。残高 1.8cm を測る。**59** 褐釉陶器四耳壺の体部片で、肩部下方に一条の沈線を配す。釉は外面の下方まで施され、中ほどからは滴のように垂れている。体部の外面下方と内面全体は、施釉されずに褐色の露胎となる。色調は暗オリーブ褐色、胎土は褐色で緑灰色の粒子を含む。最大径 18.1cm、残高 19.7cm を測る。**60** 褐釉陶器壺の底部片で、細身の上げ底となる。施釉は底部まで行われ、色調は灰オリーブ色、胎土にはぶい赤褐色で、白色粒子をわずかに含む。底径 5.0cm、残高 5.3cm を測る。**61** 陶器盤の口縁部片で、口縁部を方形状に肥厚させ、上面は凹面をなしており、釉をふき取って薄い施釉としており、一部に砂目が残る。色調はオリーブ灰色、胎土及び露胎部分は明褐色を呈し、全体に細螺が含まれる。**62** 陶器鉢もしくは、盤の体部上半片で、口縁部は厚みのある玉縁状を呈し、内面は突帯状に突出する。体部はやや丸味を帯び、外面は露胎で口縁端部から内面にかけて施釉される。色調は露胎が褐色を呈すが、内面は、灰白色の薄い釉がかかる。口径 22.6cm、残高 5.3cm を測る。**63** 陶器鉢の体部上半片で、口縁部は厚い玉縁状を呈し、体部は丸みを帯びて湾曲する。施釉は内外の両面ともに行われ、色調はにぶい赤褐色、胎土は明褐色に白色粒子を含む。口径 17.3cm、残高 5.0cm を測る。**64** 陶器鉢の底部片で、平底を呈す。外面は露胎で、内面は施釉される。色調はにぶい橙色、胎土に白色粒子を含む。**65**

陶器桶鉢の体部片で、色調はにぶい赤褐色、胎土に砂粒を含む。**66** は須恵質片口鉢の体部上半部片で、口縁端部が三角形状を呈し、体部は直線的に開く。調整は外側に斜位の指頭によるナデを施し、内面をナデにより仕上げる。色調は灰白色で口縁部外側のみ暗灰色を呈す。胎土にはわずかな白色粒子を含む。残高 8.9cm を測る。**67** 須恵質鉢の体部上半部片で、口縁端部が三角形状を呈し、体部は直線的に開く。調整は口縁端部から外側全体を横ナデで仕上げ、内面は斜位のナデを施す。色調は灰白色、胎土には粗目の砂粒を多く含む。口径 24.4cm、残高 6.6cm を測る。**68** 土師器の小皿で、調整は口縁端部が方形状を呈す。上部には L(1段) の太めの原体を絡条体にして連続的に押圧する。調整は外側に横位のハケメ(カキメ状)を、内面には斜位のハケメを施す。色調は暗赤褐色、胎土に砂粒を多く含む。**75** 土師質鉢の口縁部片で、厚みのある逆 L 字形口縁で、口縁端部は丸みを帯びる。上部には L(1段) の細い原体を絡条体にして連続的に押圧する。調整は外側に縦位及び斜位のハケメを、内面には横位及び斜位のハケメを施す。色調は暗赤褐色、胎土に砂粒を多く含む。**76** 土師質鉢の口縁部片で、厚手の逆 L 字形口縁で、口縁端部は方形状を呈す。上部には R(1段) の太くてゆるい原体を絡条体にして連続的に押圧する。調整は内外の両面ともにナデを施す。色調はにぶい赤褐色、胎土に細かい砂粒を含む。**77** 土師質鉢の口縁部片で、逆 L 字形口縁で、口縁端部を丸く納める。上部にはおそらく燃った原体を絡条体にして連続的に押圧するのであろうが、節が判然としない。この場合、燃りがかなり緩い 1 段燃りか、0 段の 1 カットを原体としている可能性があろう。ただし、0 段の場合は 3 本以上による多条にすることで、原体を安定させたものと考える。調整は外側に縦位のハケメを、内面には横位のハケ



第28図 平場出土遺物 (57~81:1/4, 82:1/5)



第29図 平塙出土遺物(1/4)

メを施す。色調は暗褐色、胎土にやや粗い砂粒を少し含む。78 鉄製の刀子で、先端及び基部側を欠く。若干の反りが観察される。残長 8.6cm、刃幅 2.0cm を測る。79 滑石製石鍋の口縁部片で、破片を利用して加工を施し、製品化を意図するものの、未完成品のまま廃棄されたものと考える。石鍋の突底部を削り取り、側面の一部にも加工痕が観察される。残高 5.2cm、厚さ 1.5cm を測る。80 滑石製石鍋の突底部片で、破片を利用して加工を施し、製品化を意図するものの、未完成品のまま廃棄されたものと考える。口縁部と突底部より下方部分、両側部の全てを切断したもので、切断の痕跡は確認できるがノミ等による加工痕は観察できない。残高 3.0cm、厚さ 2.2cm を測る。81 滑石の板状石材で、周囲に打製の粗い加工痕が観察される。長さ 7.3cm、幅 10.8cm、厚さ 2.0cm を測る。82 滑石の石材で、表面は自然面、裏面は剥ぎ取り面。右側縁は削取り面と考えられる。自然面の磨減状態は、転轍もしくは、巨礫の状態で地表に露出していたものを原材として、そこから剥ぎ取られたものと考える。長さ 17cm、幅

19.5cm、厚さ 8.7cm を測る。

表採等の遺物(第29図)

83 青磁碗の口縁部片で、龍泉窯系。口縁部は直線的に開き、外面は無文、内面の口縁下に一条の沈線を配し、下方に片彫の花文(蓮華文か)を描く。色調は緑灰色、胎土は灰白色を呈す。84 青磁小碗の口縁部片で、龍泉窯系。口縁部は外反しし体部に丸味を帯びる。外面は無文、内面の見込みは段をなしており、体部から底面にかけて片彫の花文(蓮華文か)を描く。色調にぶい黄色、釉のヒビに黒色のシミが入り込む。胎土は灰白色を呈す。残高 3.8cm を測る。85 青磁碗の体部下半部片で、体部下半は丸味を帯びて重心も低い。底部は厚底で高台は内外の両面から面取りされている。内面の見込みは沈線状を呈し、内外ともに無文である。色調はにぶい黄橙色、胎土はにぶい橙色を呈す。底径 6.0cm、残高 3.1cm を測る。86 青磁碗の体部下半部片で、体部下半は丸味を帯びて重心も低い。底部は厚底で高台はやや外方に張り出す。内面の見込みは沈線状を呈し、内外ともに無文である。なお、底面には不鮮明ではあるが、四文字からなる刻印が観察される。色調は黄褐色、釉に気泡が多く見られる。胎土は灰黄色を呈す。底径 6.4cm、残高 3.9cm を測る。87 青磁碗の体部片で、やや丸味のある体部から、直線的に口縁部が開き、口縁端部を丸く納める。外面には弁の中心線が稜線となる錦蓮弁文を配す。色調はオリーブ灰色、釉は全体に厚めにかかる。胎土は灰白色を呈す。残高 5.9cm を測る。88 青磁碗の体部上半部片で、口縁部は直線的に開き、体部下半はやや丸味を帯びる。口縁端部の外面は段をなし、その下方に縱位の櫛目を入れ、片彫で錦のない蓮弁文を一周させる。内面には口縁下に一条の沈線を配し、下方に片彫の草花文と櫛目文を組み合わせて描く。色調は灰オリーブ、胎土は灰白色を呈す。口径 12.8cm、残高 3.5cm を測る。89 軒丸瓦の瓦当片で、蓮弁の頭部とやや梢円形を呈した外区朱文の一部が観察される。型式は判然としないが、鴻臚館系軒丸瓦の可能性を考える。

おわりに

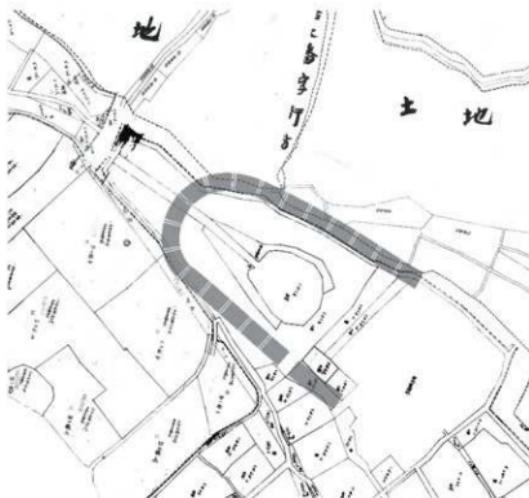
● 旧石器について

3点の資料が得られたが、いずれも後世の遺構や包含層に含まれており、本来の層位からは遊離したものである。(以下、遺物番号は第4図)

1の細石核は、剥離面は正面と右側面に認められる。打面は長方形を呈し、調整は頂部を大きく剥ぎ取って打面再生を行っており、野岳・休場型に位置づけられよう。①。3の打製片刃石斧は、断面形がかまぼこ状の半円形を呈し、刃部は両面加工で刃部側から大きく剥離して片刃状に整形する。また、右側縁を含め表裏両面には自然面が多く残る点から神子型石斧と考えられる②。当資料は、旧石器時代の終わりから縄文時代の草創期に位置付けられよう。

以上、杉原敏之氏の旧石器時代石器群の編年に照らせば、1の細石核は9段階に位置付けられよう③。また、3の打製片刃石斧は、少なくとも12段階あたりまでに位置付けられ、縄文草創期の土器群との関係が問題となろう。

- ① 芝庫次郎 2007「細石器群の到来とその変遷について」『九州旧石器』第11号 九州旧石器文化研究会
- ② 桐田義章 1981「いわゆる『神子型石斧』の資料」『九州歴史資料館研究論集』7九州歴史資料館
- 同 1990「いわゆる『神子型石斧』の資料」(2)『九州歴史資料館研究論集』15九州歴史資料館
- 同 1992「いわゆる『神子型石斧』の資料」(3)『九州歴史資料館研究論集』17九州歴史資料館
- ③ 杉原敏之 2015「第1節旧石器時代石器群の編年」【第IV章福岡における旧石器文化の特徴】『福岡の旧石器文化』福岡旧石器文化研究会



第30図 環濠集落想定図(下図は明治の和紙図)

● 弥生時代の遺構と遺物

環濠の一部を検出しており、まず、その広がりについて検討しよう。

調査区外の丘陵南東端部では、古い土取り跡の崖面に複数の弥生土器が露出するのを確認しております。環濠は現在の残丘部を越えて南東方向に延びるものと考えられる。また、調査区の北西側には、志賀神社参道に取りつく正面の石段が存在し、その付近において丘陵部が約3mの落差を生じている。そのことから、その当りを境として環濠は、大きく曲がって北東側に方向を変えるものと考える。

さらに、境内地の東側には建物と進入路が存在しており、やはり、丘陵部の段差が認められるところから、先の北東側に進んだ環濠は、再び南東に方向を変え、丘陵部東側斜面に沿って延びて行くものであろう。つまり、丘陵の高所部分となる標高14m付近を境と

して、その高さを取り囲む形で存在したと考える。そこで、それらの点を地図上(第30図)に求めて行くと、南北85m以上、東西35m程の規模を有する環濠集落の存在が想像されるのである。なお、調査区内の標高は、14.5m前後を示し、北西に続く志賀神社境内が標高15.2mを測る。また、当丘陵地の西側に広がる沖積地の標高が約8m付近であることから、比高差は7m前後となる。

次に、環濠内及びSX2検出土器の編年的検討を通じ、環濠の形成・盛期・終焉時期を考える。(以下、遺物番号は第6図、第7図、第9図、第10図)

1の口縁部外面に粘土を貼り肥厚させ、下方に段を有すものと2の肩部の段、内面の屈折は板付I式の特徴で、環濠下方の10の壺、20の壺も同様である。4の突帯を有す高杯と11~14の高杯は同一時期と見なされ、15の鉢は1の壺同様口縁部を肥厚させてお

り、板付 I 式の範疇と考えられる。5 ~ 7 と 16、17 の突帯文甕に関しては、断片的であるが、5 はやや強い屈折部に直接キザミメを施し、6 の屈折はやや強い特徴を示す。対して 7、17 の屈折は弱く直線的となる。唯一、口縁部等が分かれる 16 は、菜畑遺跡④の 8 層下層出土土器に近く、夜白 II a 式相当と若干古く考えたい。また、後者については夜白 II b 式相当と考え、11 ~ 14 の高杯群も含めて夜白 II b・板付 I 式の範疇と捉え、その時期幅を夜白 II 式 ~ 夜白 II b・板付 I 式と考えたい。SX2 では、47 は夜白式の黒色磨研壺だが、長い口縁部や頸部と肩部の屈折は、すでに板付 I 式の特徴に近い様相を示していくよう。48 ~ 50 の壺は、いずれも肩部に段を有し、内面は屈折して稜線となることから、板付 I 式の範疇であろう。52 ~ 56 の突帯文甕について、55 はヘラ等による下方からのキザミメとナデによる調整を行なうが、それ以外は、貝殻腹縁のキザミメを突帯正面より施し、調整は条痕である。口縁部の突帯はいずれも口縁端部に位置しており、52 の口縁部は外反するが、それ以外は直立気味となる。これらの特徴は、環濠内の資料と並行すると考えられ、55 は環濠内の古相のものと同様で夜白 II a 式と捉え、それ以外は 47 ~ 50 の板付 I 式に乗る夜白 II b 式と考えて矛盾はなかろう。

以上の年代観から、環濠の形成及び使用的時期を、夜白 II a 式 ~ 夜白 II b・板付 I 式共伴期と捉え、その盛期を夜白 II b・板付 I 式共伴期に置くことが可能と考える⑤。なお、その終焉に関しては、環濠の上層で得られた土器資料の 21・22・23 が参考となる。21

は如意形口縁に S 字状カーブの形状、口縁端部は尖り気味となり、キザミメも小さく間隔が開く。頸部には一条の沈線文があり、板付 II 式の特徴を示す。22 はハケメが底部に至り、胴部への立ち上がりラインも開くことから板付 II 式と考える。なお、23 は甲高い厚底を呈しており、板付 II 式より新しく弥生の前末期～中期初頭頃の所産である。つまり、弥生前期後半の時期には、環濠はかなり埋もれた状態であったことがうかがえる。

今後の課題となるのは、江辻遺跡第 2・3 地点⑥における弥生早期集落との関係であろう。土器の様相を比較すると、突帯文甕一部は、当遺跡の環濠や SX2 の古相に近い。また、文献⑦の 7 図 17 の口縁部屈折は、新様相として文献⑤の第 21 図板付 I 式の範疇となり、18・19 も併行すると考えられる。そこで、江辻遺跡の形成及び使用時期は、夜白 II a 式～夜白 II b・板付 I 式共伴期と捉え、その盛期を夜白 II a 式期に置くことが可能であろう。したがって、江辻遺跡の終焉期と当環濠集落の盛期が重なることになる。今後は両遺跡の関係について、自然、地理、歴史的環境を踏まながら遺構・遺物について細かな比較検討を行なうことが重要と考える。

今回、環濠及び SX2 から弥生前期初頭の打製石器の製作に関する石核や剥片等を多数得ることができた。そこで、観察内容を提示しておく。

石材は、伊万里の腰岳産と考えられる黒曜石がほとんどで、3cm ~ 4cm ほどの角礫が原石として搬入される。27 のような形状の角礫が多いと考えられるが、28 はその利用がよく分かる例で

ある。長軸方向の平坦面を打面とし、短軸方向に剥離して剥片とするが、自然面を打面として全周の半分ほどを連続剥離する。しかし、自然面の利用範囲を大きく残したまま廃棄される。この場合、剥片の長さは原石の短軸長に限定されるため、2cm 程の短い剥片となる。石核で最も多いのは、29 ~ 34 のように、石核の打面を転移し剥離していくものである。ただし、この方法も当初の剥離作業面の下方や側面から打ち剥がすため、当初の作業面の面積に限定されたものとなり、剥離された剥片は 28 と同様の短いものとなる。結果として、68 のように表面に複数方向の剥離面を有する幅広剥片が完成する。68 ~ 74 等の剥片を観察すると、側面等に自然面を残しており、これは剥離作業面を予め作成してから、剥片の剥離に進むのではなく、当初より原石の周囲に対し、左右のどちらかに連続的に剥離を進めた結果、進行方向側に自然面が残る。あるいは、打面を転移する場合にも、周囲の自然面に剥離を進め、それもランダムに行った結果と考えられる。また、裏面にはバルバースカ、末端がヒンジ・フラクチャを生じたものが多く、比較的粗く剥離された状況もうかがえるのである。これは、目的の剥片が石刃状の整った形状である必要はない、幅広で短く、バルブや末端の厚み、全体の歪み、自然面等があつても問題はないということにならうか、製品は、25 石錐、63 石鐵、64 尖頭状の石器で、打面再生等剥片を利用した 26・35 の削器等と剥片のサイズと同様に小型品で、全て黒曜石である。65 削器、66 打製石庖丁等の大型のものはサスカイトやホルンフェルス

が使用される。その他、大陸系の磨製石器である24石斧丁^⑦、62柱状石片刃石斧等が加わるものであろう。

以上、石核や剥片、製品等から得られる状況は、夜臼式から板付I式段階で確認されるもの^⑧と同様と考えられる。

なお、43玄武岩製石核と41、42、75の玄武岩製の剥片については不明な点が多い。原材の搬入元に関しては、福岡市西部の今山・毘沙門山、糟屋北部の津屋崎付近^⑨等が考えられよう。

④唐津市教育委員会 1982「葉畠遺跡」唐津市文化財調査報告書第5集
⑤山崎純一郎 1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」『幾山猛先生古稀記念古文化論叢』
⑥新宅信久 1996「パズルの一片—弥生時代早期の集落の様相」『考古学』17号
⑦福岡考古活躍会
⑧鈴納三・小田富士雄編 1991「日韓交渉の考古学」弥生時代総合株式会社六興出版
⑨橋昌信 1987「畿内時代晩期および弥生時代の剥片石器—宇佐盆地貝塚を中心として—」『東アジアの考古と歴史』中岡崎敬先生追念記念論集
福岡市板付遺跡や十郎川遺跡の板付I式に伴うものと近似する。
⑩石橋澄 2004「福岡地区」『福岡県地学のガイド』株式会社コロナ社

● 古墳時代の遺構と遺物

今回の横穴墓群の検出は、柏屋町内の初見である。丘陵部西側の崖面に、三段に掘り込まれていたが、後世の土取りや擁壁工事によって大きく削平され、玄室の一部を残すのみであった。おそらく、今回の調査範囲外にも広がっていたものと考えられるが、南側は完全に消滅している。また、北側についても擁壁部分は消滅している。ただし、その北西側である志賀神社の敷地内では、まだ横穴墓群が存在するものと予想する。

そもそも、糟屋平野における横穴墓の存在は極めて少ないようで、篠栗町と須恵町で周知されている程度であろう。須恵町では、昭和47年頃に鉱害復旧の土取り場となつた大塚横穴墓群は消滅しているが、当時、鉱害復旧事業に途中から関係した筆者の父親が、崖面に防空壕のような横穴がいくつも開いていて、大きな石で塞いだものや机のように偏平な石が転がっていた話をしていた。その後、現地は宅地として造成されたが、訪れてみると煙の法面に半ば埋まつた横穴墓1基とテーブル状の巨岩(底石か)ー基があり、周囲に須恵器や土師器片が無数に散乱していた。特に、赤紫色の須恵器片がかなりあったのを覚えている。しばらくして、工事関係者から6世紀後半から末頃の須恵器の腹と杯蓋の破片、それに馬歯と考えられる骨を譲ってもらった。現在、腹と杯蓋は篠栗町歴史民俗資料室に寄贈しているが、馬歯は土中に廃棄した。

2013年、篠栗町大字和田字松浦に所在した松浦横穴墓群^⑩が調査され、10基の横穴墓が2段に構築されていた。開始期は7世紀前後で、追葬も含めると7世紀末頃まで継続されるようである。特徴としては、羨道部に横穴式石室と同様な石積みがなされており、遠賀川流域のものとの共通性が見受けられる。

当遺跡の横穴墓は、いずれも破壊が著しく、比較材料に乏しい。ST1については、側壁や奥壁が直線的で、軒先を思わせるラインが存在する。第12図の2は、土師器の杯身であるが、筑紫野市野黒坂34号住居出土のもの^⑪に近似しており、6世紀後半から末頃に位置付けられよう。松浦横穴

墓群より一段階古くなる可能性がある。また、ST2より検出された鉄滓は、4、5の土師器の資料から、およそ6世紀後半以降と考えられ、横穴墓への鉄滓供獻の側面を示しており、古墳時代の鉄器生産との関係が浮上する。なお、古墳出土の鉄滓が福岡平野の西部に集中する中、東部に位置する今回の例はおそらく、初見であり重要なとを考えられる^⑫。

ただし、当横穴墓内には中世以降の遺物が混入しているため、鉄滓資料が横穴墓に確実に伴うものは断定できない。

⑨篠栗町教育委員会 2014「松浦横穴墓群」篠栗町文化財調査報告書8集
⑩福岡県教育委員会 1970「福岡南北琵琶湖関係埋蔵文化財調査報告書」第1集
⑪小堀尾「鉄滓出土古墳の研究—九州地域—」『古文化論叢』61集古文化研究会

● 中世の遺構と遺物

検出された遺構は、掘立柱建物、櫛、土坑、溝状(堀状)遺構、平場、盛り土状遺構であり、柱穴等の分布から、調査区南側でも建物を想定することは可能であろう。建物群の西側には、櫛と溝状(堀状)遺構があって、その外方には、平場を設けて建物と櫛状のものを置いている。

また、北側では櫛の外側に盛り土状遺構(土塁の可能性)を設けており、解釈として一定の防衛機能を有した可能性が高い。なお、調査区北側に志賀神社本殿を含む平坦な境内地が広がっており、建物群等の中心はその辺りに位置すると想定される。

全体の時期については、検出した遺物中心に推定を行なうが、分類及び年代については、太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡

遺物番号	分類	11C前半	11C後半	12C前半	12C後半	13C前半	13C後半	14C前半	14C後半	15C前半
2	皿IX 1d						oooooooooooo	oooooooooooo		
21	椀V 4a			oooooooooooo						
24	椀IV	oooooooooooo								
25	椀V 4b	oooooooooooo								
26	椀V		oooooooooooo							
27	椀V		oooooooooooo							
28	椀V		oooooooooooo							
29	椀V	oooooooooooo								
30	椀IV 1	oooooooooooo								
31	皿VI 1b		oooooooooooo							
32	皿VIII		oooooooooooo							
33	皿IX 1c					oooooooooooo	oooooooooooo			
34	皿IX 1c					oooooooooooo	oooooooooooo			

表1 輸入磁器の年代(白磁) [第14図、第27図、第28図]

XV-陶器分類編』を基本として、輸入陶磁器を中心試みる。なお、白磁・青磁・陶器の順に進めることにする。

白磁の資料(表1参照)は、椀が8点、皿が5点である。全体では11世紀後半～12世紀前半と12世紀中頃～12世紀後半、13世紀後半～14世紀後半と概ね3時期に区分される。13世紀の白磁に関しては、全体の傾向として中頃を中心にそれ自体がかなり減少する時期であることから、11世紀後半から14世紀頃まで継続して検出されると言えるが、全体量は少ない。

青磁の資料(表2参照)は数量が多く、龍泉窯系28点、椀(小椀を含む)25点、杯2点、皿1点、同安窯系9点、椀7点、杯1点、皿1点となっている。全体では12世紀中頃～後半、12世紀末～13世紀前半、13世紀中頃～14世紀初頭、14世紀と概ね4時期に区分される。数量としては、12世紀中頃～後半のものが最も多く、時期が下るにしたがい、数量は減少している。

磁器類の年代は、表3に示すように11世紀後半から14世紀

後半に至るまで継続が認められる。内容を細かく見て行くと、11世紀は後半頃から徐々に白磁が入りはじめ、12世紀後半頃まで継続する。その場合12世紀の前半と後半では、ほぼ変わらない量が入るようであるが、総体的に少ない量である。ところが、12世紀の半ば頃から龍泉窯系を中心同安系も含めて青磁が入りはじめ、12世紀後半頃には、白磁を凌駕する量となる。さらに、13世紀になると白磁は一旦途切れてしまうが、龍泉窯系は蓮弁文青磁が継続的に入ってくる。しかし、13世紀後半あたりから青磁も少なくなり、14世紀頃にかけて新たにたらされた白磁は、口禿の皿類で小ぶりなものとなる。また、57、58の青磁の合子は、おそらく12世紀後半から13世紀前半の磁器搬入が最も充実していた頃に入ったものと考えられる。

輸入陶器類では、62、63の鉢がIV類で61の盤も含め13世紀頃と考えられる。また、59の四耳壺はVI類で、60の褐釉壺も含め13世紀前半頃に位置付けられようか、磁器類では白磁が減少し、龍泉窯系の蓮弁文青磁が入る時期

に相当しよう。また、搬入の国産陶器である20の常滑焼の壺は、口縁端部がやや丸みを帯びて、縁帶を呈しており、14世紀前後の時期が考えられる。

以上、輸入陶磁器等から考えると、11世紀後半には丘陵上に建物群等が構築され、12世紀から13世紀前半期を盛期とし、その後、13世紀後半から14世紀後半まで継続するようである。

当該期における周囲の遺跡等における動向を概観すると、戸原麦尾遺跡³⁾が時期的に重なることになろう。多々良川左岸に形成された3つの屋敷地跡、水田址、墓地等から構成され、12世紀中頃から14世紀中頃まで継続的に営まれた集落で、菅崎八幡宮が所領していた莊園の一隅を示す重要な遺跡である。調査区のI区で検出された屋敷地は、一辺が50mほどの方形区画内に営まれ、周囲に二条の溝状構造が並行し、その間には最大幅3m前後、最小幅2m前後の土塁の存在が想定され、13世紀後半以降集落の周囲に新たに形成された状況である。また、II区では13世紀後半に形成された屋敷地が14世紀前半に廃

遺物番号	分類	11C 前半	11C 後半	12C 前半	12C 後半	13C 前半	13C 後半	14C 前半	14C 後半	15C 前半
1	龍椀 II b				oooooooooooo					
4	龍椀 I 4b			oooooooooooo						
5	龍椀 II b			oooooooooooo						
6	龍椀 II b			oooooooooooo						
7	同椀 II ?			oooooooooooo						
8	同皿 I 1a			oooooooooooo						
12	龍椀 IV ?						oooooooooooo	oooooooooooo	oooooooooooo	
13	龍杯 III					oooooooooooo	oooooooooooo	oooooooooooo	oooooooooooo	
16	龍椀 I			oooooooooooo						
17	龍椀 II a									
22	龍椀 ?									
23	龍小椀 I 3			oooooooooooo						
36	龍椀 I 1a			oooooooooooo						
37	龍椀 I 1a			oooooooooooo						
38	龍椀 I 1c			oooooooooooo						
39	龍椀 I 2a			oooooooooooo						
40	龍椀 I			oooooooooooo						
41	龍椀 I 2a			oooooooooooo						
42	龍椀 I 4b			oooooooooooo						
43	龍椀 II b				oooooooooooo					
44	龍椀 II b				oooooooooooo					
45	龍椀 II b				oooooooooooo					
46	壺か水差?									
47	龍椀 II a				oooooooooooo					
48	龍杯 III 1a					oooooooooooo				
49	龍皿									
50	同椀 I 1b			oooooooooooo						
51	同椀 I 1a			oooooooooooo						
52	同椀 I か 2			oooooooooooo						
53	同椀 III 1c			oooooooooooo						
54	同椀 I 1b			oooooooooooo						
55	同杯 III 2			oooooooooooo						
56	同椀 I			oooooooooooo						
83	龍椀 I 2a			oooooooooooo						
84	龍椀 III 1b					oooooooooooo	oooooooooooo	oooooooooooo	oooooooooooo	
85	龍椀 II d					oooooooooooo				
86	龍椀 II d					oooooooooooo				
87	龍椀 II b					oooooooooooo				
88	龍椀 II 6a					oooooooooooo				

表2 輸入磁器の年代(青磁) [第14図、第18図、第20図、第22図、第27図、第28図]

	11C 前半	11C 後半	12C 前半	12C 後半	13C 前半	13C 後半	14C 前半	14C 後半	15C 前半
白磁		oooooooooooooooooooo			oooooooooooooooo				
青磁			oooooooooooooooooooo		oooooooooooooooo				

表3 輸入磁器の年代(白磁と青磁)

絶されており、遺構面を覆う焼土層が確認されている。屋敷地を構えた集落遺跡は、筥崎八幡宮領に属しており、遺跡が所属する戸原は、12町の田地があり屋敷地が4か所に存在したようである。

集落の最終的な廃絶は、II区で確認された焼土層とも関連し、建武3(1336)年3月の多々良川の合戦、菊池武光が九州探題斯波氏經を破った貞治元(1362)年9月の長者原の合戦が大きく影響するとされる。

以上、戸原麦尾遺跡の動向を観察すると、まず、志賀神社遺跡が所在する仲原村が、筥崎八幡宮領の中原分6町3反との記載があるように所領として存在しており、戸原麦尾遺跡の集落形成と同時期くらいに当遺跡も形成されて

いる。さらに、その集落形態が、方形区画内に形成され、13世紀後半頃になると、土堤と溝による防御施設を備えた形状に変化している。当遺跡では、比高差7mの丘陵地を占有地として選択することが、すでに防衛を意識した居館づくりを行ったと考えられる。さらに、丘陵西側に柵や盛り土状遺構、横堀的な溝状遺構の配置、その外側に平場をつくり1間×1間の建物と柵状の遺構を配すなど、より堅固な施設として存在した。これらの構えが当初より設置されたものか、戸原麦尾遺跡の集落のように13世紀後半頃に整うのかは判然としない。ただし、その終焉については同時期頃と考えている。おそらく、戸原麦尾遺跡の集落廃絶同様に、建武3(1336)年

の多々良川の合戦、貞治元(1362)年の長者原の合戦が深く関わるものと考える。

なお、居館の主については、志賀神社の神職にあった吉原因幡(守)系の可能性が高い¹⁵⁾。

参考文献
福岡市教育委員会 1988『戸原麦尾遺跡(I)一福岡市多々淨上水場建設に伴う緊急調査の概要。』福岡市埋蔵文化財調査報告書第189集

福岡市教育委員会 1989『戸原麦尾遺跡(II)一福岡市多々淨上水場建設に伴う緊急調査の概要。』福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集

福岡市教育委員会 1990『戸原麦尾遺跡(III)一福岡市多々淨上水場建設に伴う緊急調査の概要。』福岡市埋蔵文化財調査報告書第217集

参考文献
市瀬洋子 1992「第二章中世の柏屋町」「柏屋町誌」柏原町町誌編纂委員会

参考文献
八幡宮運宮、神社明細帳、吉原家資料による。

図版



測量地全景（北西から）



環壕挖掘状況（西から）



環壕土層状況（西から）



SK3（貯蔵穴）完掘状況（南東から）



ST1 完掘状況（南西から）



ST1 完掘状況(南西から)



ST2 完掘状況(南西から)



ST3 完掘状況(西から)



ST4 完掘状況(南西から)



調査地南東側柱穴群(北西から)



SB2 完掘状況(北西から)



盛土状遺構土層遠景（南東から）



盛土状遺構土層近景（南東から）



SAI 完成状況(東から)



图 1



弊 56



图 3



弊 11



弊 52



古 6



弊 47



图 77



中 18



中 59



中 36



中 78



中 86

報告書抄録

ふりがな	しかじんじやいせき							
書名	志賀神社遺跡							
シリーズ名	柏屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 56 集							
編著者名	福島日出海、高橋幸作							
編集機関	柏屋町教育委員会							
所在地	〒 811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目 1 番 1 号							
発行年月日	2021 年 3 月 31 日							
所取遺跡名	所在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
志賀神社遺跡	福岡県糟屋郡柏屋町 仲原二丁目 1988、1990	403491	280175	33°36'31"	130°28'04.8"	2019.9.24 ～ 2019.11.30	約 196.5m ²	専用住宅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
志賀神社遺跡	集落	旧石器時代、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代	環濠、掘立柱建物、溝状遺構、土坑、横穴墓	弥生土器、土師器、須恵器、青銅、白磁、陶器、石器				
要 約	<p>調査では、弥生時代前期初頭の環濠と貯藏穴 1 基、古墳時代後期の横穴墓 4 基、中世の掘立柱建物 2 棟、方形土坑 1 基、棚列、溝状遺構、盛土状遺構とともに、柱穴群を検出した。特に、弥生時代前期初頭には環濠集落が存在していて、江辻遺跡 2・3 地点との関係が注目されよう。</p> <p>また、12～13 世紀を中心とする居館の存在とその終焉が重なる建武 3 年(1336)の多々良用の合戦や貞治元年(1362)の長者原の合戦との関連性が考えられる。</p> <p>なお、旧石器時代末から縄文時代草創期頃の神子柴型石斧は、糟屋郡内で初めて出土しており、戸原遺跡の縄石器群や馬与丁池の槍形尖頭器を含め草創期文化の一端が示された。</p>							

志賀神社遺跡 柏屋町文化財調査報告書第 56 集

令和 3 (2021) 年 3 月 31 日 発行

発行 柏屋町教育委員会

〒 811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目 1 番 1 号 (柏屋町立歴史資料館)

印刷・製本 株式会社九州カスタム印刷

〒 812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵三丁目 16-15